# アーバン・アドバンス

2012.3 \_No. 57

#### [特集] 災禍からの復興と文化 ここにある私たちの生活 5 和合 亮一 詩人 デザインプロジェクト・安全と災害のためのデザイン 11 デザイン・医療デザイン・モビリティデザイン 名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 教授 國本 桂史 コミュニティデザイン「震災復興から"みどりのまちづくり"へ」 19 兵庫県立大学大学院 緑環境景観マネジメント研究科 准教授 兵庫県立淡路景観園芸学校 主任景観園芸専門員 林 まゆみ 風景の防災力 27 東京大学生産技術研究所 講師 川添善行・都市・建築設計研究所 川添 善行 応援します!東北!応援します!陸前高田市! 34 名古屋市総務局総合調整室 主幹(被災地支援) 加藤 誠司 陸前高田市復興対策局 技師(名古屋市派遣職員) 阪野 武郎 名古屋発 イタリアに学ぶ歴史まちづくり 45 名古屋市住宅都市局歴史まちづくり推進室 室長 山内 正照 名古屋都市センター事業報告 〈平成22年度 第1回まちづくりセミナー〉 コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる 55 講演録 studio-L 代表、京都造形芸術大学教授 〈平成22年度 自主研究〉 名古屋都市圏におけるエコ・コンパクトな市街地形成 64 調査研究 名古屋都市センター 調査課 研究主査 河村 幸宏 〈平成22年度 自主研究〉 中川運河のポテンシャル発信 ~運河魅力の共有のために~ 68 元名古屋都市センター 調査課 研究主査 〈平成22年度 自主研究〉 まちの"界隈"分析 72 ~那古野地区に焦点を当てて~ 名古屋都市センター 調査課 研究員 岩田 悠佑 〈平成22年度 NUIレポート〉 76 名古屋における計画道路の歩み概観 ~古代から市区改正まで~ 名古屋都市センター 専任研究員 杉山 正大 〈平成22年度 NUIレポート〉 78 名古屋の賑わいスポットと旬なスポット

元名古屋都市センター 調査課 研究主査

井村 美里

# ここにある私たちの生活

# 詩人 和合 亮一

三月十一日。

地震の後、津波や、原発事故による放射線の 影響などで大勢の人々が避難を強いられるな か、自分も明日は故郷を追われるかもしれない と思った。自分の感じているこの絶望や怒り、 不安といったものを何か形にしなくちゃいけな い、誰かに手渡したいという、物を書く人間と しての意地みたいなものが湧いてきた。しかし どこにそれを書き表せば良いのか、思い浮かん だことを、ただ手帳に書き続けていた。

たった1人で夜、部屋に居ると、そこに閉じ込められた感じがして絶望感で一杯になった。知り合いから安否を尋ねるメールがたくさん届いていたが、1つ1つに返事をする気力もなかった。ツイッターで自分の無事を知らせようと考えた。いくつかの発信をした後で、「行く着くところは涙しかありません。私は作品を修羅のように書きたいと思います」と綴ったところ、別のスイッチが入った。

頭の中が白熱し、一心不乱になって書き続けた。大きな余震が起こるたびに部屋を出て階下に避難し、それがおさまるとまた戻ってどんどん浮かんでくる言葉を書きつけた。思えばずっと、とにかくひっきりなしに手帳に何かを書き続けていたのも、言葉が浮かんできて仕方がなかったからなのかもしれなかった。つぶやきを始めた直後から読み手の方々から数多くのメッセージをいただいた。

翌晩にはフォローしてくれる人が500人以上になり、また書こうと思った。繰り返しやってくる余震に耐えるため一人で身を潜めていたと

き、自分のよく知っている街が津波で流され、 後に瓦礫の山だけが残されている映像が、何度 も繰り返された。そして私の詩も、これら悲し い津波の跡のように、根こそぎ壊れてしまうべ きだと感じた。そうしたうえで粉々になった言 葉を追い掛けたいと思った。

ツイッターに短い詩を書き続けた。「この震 災は何を私たちに教えたいのか。教えたいもの なぞ無いのなら、なおさら何を信じれば良いの か」(3月16日)。「あなたはどこに居ますか。 私は暗い部屋に一人で言葉の前に座っていま す。あなたの言葉になりたい」(18日)。「夜の 深さに、闇の広さに、未明の冷たさに耐えてい ること。私は一生忘れません。明けない夜は無 い」(19日)

はじめのうちは震災から逃れてきて避難所で 夜に震えている人々を想像しながらパソコンに 向かっていた。しかし、現実の被災者に限らず、 自分と同じようにパソコンの画面や携帯などの 前にいる現代人も、何らかの心の傷を抱えた同 じ避難の人々なのではないかと思うようになっ た。はっきりしているのは震災の前と後では、



### 

詩人。国語教師。1968年福島県生まれ。1999年、第一詩集「AFTER」で第4回中原中也賞受賞。2006年、詩集「地球頭脳詩篇」で第47回晚翠賞受賞。地元ラジオのパーソナリティや、福島のまちづくりに関わる。東日本大震災で被災後も、福島からツイッターで作品を発表し続け話題となる。現在、被災者へのインタビューを重ね、福島で暮らす人たちの言葉、文化発信を続けている。

世界に対する見方が完全に変わってしまったということだった。とにかく詩を書き続けた。これらはその後、「詩の礫」(徳間書店刊)という詩集にまとめられた。

震災から三週間が経った。ガソリンが手に入ったので、幼い頃からよく遊びに出かけた、親しい相馬の松川浦へと出かけた。津波の事実は想像以上の凄惨な表情を見せて、破壊の跡を残していた。防波堤は叱られたようになって、横殴りの波に半身をもぎ取られたまま、春のおだやかな風に晒されていた。

物々しいヘリコプターの音と影が追う先には、運ばれて横倒れになっている、幾艘もの船…、滅茶苦茶の家、ひしゃげた車、不規則に撒かれている畳、倒れた電信柱。スプーン、魚の頭、スチール机、右の靴、ランプ、消火器、届けられない小包…。

一人一人がここで生きてきた時間を辿ることなど出来ない。暮らしていた温度は、すっかりと消えてしまっている。〈廃墟〉には何の法則性も存在しない。私たちの暮らしは、世界との約束事があって初めて、ただすまいというものが構成されていく。しかし自然の脅威は、それを無効とし、生活を破綻させていく。

ファミリーアルバムがそちこちに置かれてある。持ち主はどうしたのだろうか。流されてしまった家、暮らし、命…。

生きていることを感謝しなくちゃいけないと 感じた。そして死者と対話するように追悼の詩 を、松川浦に出掛けた時から毎晩、眠る前に書 くようになった。これはやがて「詩ノ黙礼」(新 潮社刊)という詩集にまとめることになった。

そして「詩の邂逅」(朝日新聞出版刊)という詩集が、「詩の礫」「詩ノ黙礼」の二冊と同時に初夏に刊行されることになった。この詩集は例えば「詩ノ黙礼」が鎮魂と死者との対話の時

間をどこかで求めていたとするならば、言わば 生者との対話を意識したものであった。具体的 に被災者との対話を録音して、家に戻ってきて からその相手の方のことを想って詩を書くとい うことを続け、それを一冊にした。

きっかけは「詩ノ黙礼」を書くために浜通り を取材をしていた折に、現地の知人と言葉を交 わしたことであった。私もまた被災者であった が、それぞれの被災経験に耳を傾けるというこ とが、何かをもたらしてくれると直感した。む しろこうした時間は震災直後の慌しい時間の中 で、ほとんど持つことが出来なかったとあらた めて思った。

まずは依頼の電話から始めた。ボイスレコーダーとカメラとを持って、ご自宅や避難所にお 邪魔をさせていただいた。お互いに緊張をしな がら言葉を交わしているうちに、それでもしだ いに自分たちの経験を語り合う言葉の中に、隠れている真実を見つけることが出来ると確信した。一番最初にお話を伺ったのは、南相馬市で クリーニング店を営む高橋美加子さんである。

私が十数年ほど前に、かつて南相馬市で暮らしていたことがあった時に、公私共にお世話になった方である。久しぶりにお会いすることが出来た。かつての交友のあった方と今、頻繁にやりとりをして現在の南相馬市の現状を伝えていると、会うなりにすぐにおっしっゃていた。

まず語られたのは津波の恐ろしさであった。 私もこの町で暮らした月日が長かったので、津 波の恐怖を知ったことがこれまでになかった し、津波警報は形だけのものと受け取っていた ことを思い出した。「これまでは津波予報が出 ても自分たちは関係ないと思っていたから。津 波と聞いてせっかく避難したのに家の様子を見 に行って、そのまま巻き込まれた方も多いらし いですね。南相馬市では1300人くらいの方(\*) が行方不明ですよ」(\*昨年の5月当時)。

地震直後から浜通りでは避難するムードが高

まった。12日と14日の原発爆発により、それは決定的なものとなった。10日間ほど避難をし、その後に南相馬市に高橋さんは戻ってこられた。昔から知る高橋さんの印象は、とにかく生まれ育った南相馬市の原町区への郷土愛をいつも大切になされている方であり、町の方々にもとても厚い信頼を得ていらっしゃった。避難から戻られて、率直に感じた町の印象を次のように語って下さった。

「帰った日の夜は、あたりが真っ暗だったことに本当にショックを受けました。町の風景は何も変わっていなくて街頭だけがついていて、ものすごく恐ろしかった。町に違うものが住んでいる感じだった。」。

放射線を恐れて、南相馬市にはしばらく物資も全く届けられなかった。「私はこの町が「地図から消されようとしている」と思ったわけ。 人が住んでいるということがまったく考えられていない。汚染されていると言われている地域に物を運んでくれる会社はないから、南相馬は空白地帯になって、食べ物もない地域になっちゃった。でも誰も悪くないの。みんな法律を守っただけ」。

現在、南相馬市の一部の地域には人が戻ってきているが、二十キロ圏内という確然とした空白地帯で出来上がっている。私は昨年の年の暮れに、防護服を着て、南相馬市に暮らした時によく出掛けていた小高区や浪江区まで、足を踏み入れた。正に「違うもの」が住んでいると衝撃的に直感した。全くの無人地帯を歩きながら、何にもつながっていない静寂さを感じ、恐ろしくなった。

高橋さんが「地図から消されようとしている」 と語ったが、その瞬間に立ち会っているのかも しれない。高橋さんは私に南相馬市で暮らす決 意の気持ちをこうだと教えてくれた。「ここで 生きていくんだから、生きやすいようにこの地 域とかかわろうという、すごくシンプルなもの なんだ」。私は話をする時間を持つことが出来 たことで、詩を書き続けながら考えてきたこと を、相手の想いに見つけることが出来て、目の 前が少し開けた思いだった。

続いて、どうしてもお話をお伺いしたい、ラジオ福島のアナウンサーがいらっしゃった。大和田新(ラジオ福島編成局長)さんである。3月11日の深夜、私たち家族は車に避難していた。スピーカーから大和田さんの声が流れてきた。「仙台市若林区で300人の遺体が見つかりました」とニュースを読み上げた後、ご自身もこみあげた涙を隠せなかった。その様子に触れて、聞いていた私たちも涙が止まらなかった。それからほぼ1ヵ月近く、大和田さんは休むことなく報道の仕事をし続けた。時折に涙ぐみながらのアナウンスは福島県の人々を元気づけていた。

最初に、二十キロ圏内へ一時帰宅した方のお話をして下さった。「川内村から一時帰宅を終えて帰ってきた60代の女性に話しをきいたら二時間泣いてましたって言うんです。泣く時間も必要なんですね。何ヶ月もたって家に行くわけですよね。家に行ったら一覧表に書いてきた大切なものをポリ袋に入れたあと、その奥様は2時間泣いてたんだそうです」。私はこのお話を聞いて「短い暮らし」という詩を書き、後日に新聞に発表した。一部を紹介させていただく。「2時間だけの帰宅が許されるなら/私は何をするだろう//玄関先の靴をそろえる/茶の間で泣く/祖母の写真を鞄に入れる/持って行きたい本を選んでやめる/パソコンのスイッチを入れてみる」(「詩の邂逅」所収作品)。

防護服を着て、土足で久しぶりの我が家に足を踏み入れる悲しさを、大和田さんは必死で伝えようとしてくれた。そして何よりこの震災そのものを〈伝える〉ことの大切さを。「福島県人はいま川でおぼれている状態です。それを東電も政府も、もちろん国会議員も、われわれマ

スコミも橋の上からただ見ているんです。 そん な現状が腹立たしいですね」。

そのように語り、大和田さんは自らも溺れるつ もりで、報道の仕事に取り組みたいという意志 を語って下さった。

福島の各場所の放射線量の数値を伝えるにも、心を込めた報告をしたいと話していたことを今でも印象的に覚えている。それは具体的にはどんなふうにすれば良いのか、はっきりとしたことは今のところ分からないが、そのような意識をまず持とうというふうに放送局のみんなで常に話し合っているとおうかがいした。また、こんな話も大和田さんからあった。

津波の後で、いわきのある浜辺で、消防団の 方々が救助活動をしていた。その時に、水の上 の畳に乗った老人を見つけた。すぐさま消防団 の方々は岸辺から老人にロープを投げて、それ を固く握らせた。彼を引き寄せようとして団員 の方々は、懸命に縄をたぐり寄せた。すると彼 はしだいに力尽きてしまい、縄を離してしまっ た。水に沈んでいく寸前に「立派ないわきを作っ てくれ」と叫んだという話をうかがった。大和 田さんも私も泣きながらその話を分かち合っ た。そしてふるさとへの誇りというものを強く したことをはっきりと覚えている。

各人の話を記録していくことで、一人ひとりの物語に触れることが出来た。そして少なくとも眼前の震災に対して、いくらかの厚みで向かい合うことが出来ると感じた。それは十人なら十人の、百人や千人ならそれだけの何かを感じることが出来るのではないか。それははっきりとしていなくとも、この町で暮らしていく私たちの暮らしの思想を宿すものになり得ると感じた。

遠藤千代子さんを、ピッグパレット郡山に訪ねた時に、簡単だが、とても大切なことに気付かされた。遠藤さんは十二日に川内村へ避難して、その四日後に郡山へ強制的に避難させられた。

避難所へと来た時には、誰もかれもがぴりぴりとしていて、とても語り合うような雰囲気ではなかったそうである。そしてだんだんと、人と話すのが億劫になり、鬱状態になっていくのが分かったそうである。口を閉ざしていくうちに、自分をどうしたらいいのか分からなくなり、消えてしまいたいとさえ思ったとうかがった。

その時に、いくらでも話を聞きますから…、とボランティアの女性が一日中遠藤さんのお話に耳を傾けてくれたそうである。遠藤さんはとにかく、全ての思いの丈を語り続けた。自分が空っぽになるまで話し続けることが出来た。すると翌日から心の元気を取り戻して、今度は誰かの話を聞いてあげたいと思うようになったそうである。「人と話すことができる快感ってあるんだなと思いましたね。人間って言葉とか出会いとか大事なんだなって。言霊っていうか。言の橋っていうか、良い言葉をどんどんかければ、良い橋がつながる気がします」と語ってくれた。

私はとても大切なことを教えられた気がした。出口の見つからない震災の意味を見いだすには、沈黙してはいけない。積極的にお互いの心の扉を開くようにして、言葉を交わし合わなくてはいけない。ならばどのようにすれば、良いのか。私たちの「言の橋」を探すのだ。

どんなふうにすれば良いのか。シンプルな結論だが、被災者にまずは耳を傾けようとするのが良いのだ。目の前に耳があれば被災者は、話をし始めるのだ。東北の人間は「口が重い」「辛抱強い」などとよく言われるが、そのように簡単に言ってのけてまとめてしまうのではなく、耳を熱心に向ける姿勢が、この震災の輪郭を求めるのにおいてとても大切な真理であると思った。

「詩の邂逅」をまとめてから後も、取材を続けることにした。それはこの度、「ふるさとをあきらめない フクシマ、二十五人の証言」(新

潮社刊)として、3月11日を前にしてまとめる形となった。「詩の邂逅」は対話体であったが、「ふるさとをあきらめない」は、インタビューに専念をした。短い簡潔な質問を心がけて、1時間から2時間の時間、ボイスレコーダーを話者に向けた。

最も大切にしていたことは、決して相手の情報をメインとして聞き続けるということではなく、あくまでも被災直後から現在までの時間をどのように過ごしてきたのか、感情の起伏を追いかけるということである。あくまでもその波を大切にして、うねりの中でお互いの心の何かが上昇してくるような感じがあれば、そこを追いかけていく。そうした中に、マスコミなどには載らない新しい真実が掘り起こされることをあらためて確信した。夢中になっているうちに、これまでに経験したことのない時間の中に居ると感じるようになった。

振り返ってみると現代人は、つまりは聞く= 耳=聴覚、ひいては他の感覚から離れて、視覚 に頼り切った生活をしているのではないかとい うことに、体の奥で気づき出してきた。

新聞・テレビはもとよりインターネットなど、全ては目で追うものだ。そして日々、それらに追いかけられるようにしているうちに、思わず横へと流してしまう。震災関連もエンターテインメントも政治も芸能の情報も、全て横並びであり、一覧性に富んではいるものの、次から次へと流れているものへの対応に追われて、感じる・考えるための生活の思想の時間は持ちにくくなる。

私たちは視覚に依存するあまりに、何かをとらえることの厚みを失っているのかもしれない。このことは何より、被災地に暮らしてここまで詩を書きながら震災の意味を問い続けて考え続けてきた私だったが、二十五人の話に耳を傾けてきて何より〈とらえることの厚み〉の鍵に、改めて強く気づかされたのである。そして、

福島からの文化はこのことを見つめ直すことから、始めなくてはいけないと確信した。

今は震災後からまだ間もないことから、様々な有り難い支援やマスコミなどの注目があるが、風化の危機は訪れるだろう。このことを差し止めるのは私たち福島で暮らす者の文化発信の力しかない。それを求めるには何から始めれば良いのか。何より私たちそのものが外へと発信していく内発力を、しっかりと持つことからこそである。ならば〈内発力〉の為に、どうすれば良いのか。私たちがこの福島の震災をどう受け止めているのかを、私たち自身が五感で知ることだと分かった。

郡山市に「青い窓」という、長年継続して出されてきた児童詩誌がある。子どもたちの詩を集めて雑誌にするという活動は五十年あまりにもなる。その創始者である詩人の佐藤浩氏は、「眼聴耳視」という言葉をとても大切にしていらっしゃった。眼で聴いて耳で視るようにして、子どもたちの詩に触れましょうという呼びかけが、この言葉の背後に含まれていると理解してきた。

震災後の心の有り様がこれから先、とても大切になってくると思う。震災の傷は癒えることなく開いたままであることに、年月を重ねて気づくだろう。このことを日本人同士が分かち合わなければ、何よりもまず先に被災者たちが互いに分かり合わなくては、被災したことの意味から始まる文化は形成されない。

震災の意味を知るためには、住んでいる私たち福島人が、もっと福島の今を知らなくてはいけない。被災後の文化への〈内発力〉を持つためには、まずは己を知ることだ。このことをひいては今、ここにある私たちの生活を伝えていくためのきっかけとしたい。

最後に、防護服を着て二十キロ圏内を歩いた 印象をもう少しだけお話させていただきたい。 南相馬市の原町区と小高区と浪江区に出かけた。この二十キロ圏内は、3月11日のままである。

町を歩いた。家々の開け放しの窓、軒先にぶら下がった洗濯物、玄関先にある倒れた自転車、崩れた屋根と壁…。12月のうららかな小春日和であった。木には柿が赤々と実っていた。

請戸の海まで行った。目の前には、現場の方々が命がけで働いている、原子力発電所の高い煙突が 見える。

河口の川の中に影を見た。季節の鮭が、上っているのだ。

命を押しとどめることは出来ないのだ。

何という静けさだ。

無人の国を私たちは作ってしまったのだ。何をどう伝えれば良いのか。日々の喧噪の隣に、分かり きれない静寂を、私たち日本は持ってしまった。

このことに目をつむるのではなく、恐ろしい計り知れない静けさに耳を傾けなくてはならない時を、 日本は、人類は、与えられたのだ。想像せよ、創造せよ。

# デザインプロジェクト・安全と災害のためのデザイン デザイン・医療デザイン・モビリティデザイン

名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 國本 桂史

### 1はじめに

2011年3月11日、私たちはけっして忘れら れない時間を経験した。ちょうどあの日は大学 内の会議室で、私がプロジェクト・リーダーを 務めている経済産業省の医療機器開発プロジェ クトの会議をしている最中であった。会議も佳 境になって来た時、少しゆっくりと揺れる感覚 があり、最初は医療機器開発チームのメンバー は連日の作業のせいで疲れて眩暈でもしている と思ったようだ。しばらくして会議室からキャ ンパスの広場に出て周りを見渡し、ようやくこ れは地震であると認識した。直後のニュースや、 国内外のWEBsiteからの情報が入るたびに、衝 撃を受けながらデザインが関われることを探り ながら、すぐに何かを進めなくてはと、世界の デザイナーに声をかけはじめた。日本は、堅実 で確実なデザイン力を通じて、日本だけでなく 世界の友人と一緒に行動しなければ、現在だけ への対応で終わってしまい、今後の世界に起こ るであろう災害への具体的対応計画への拡がり が出来ないかもしれないという危惧があった。

ヒトは失うものはあったが、私たちを取り巻く環境において根底から多くを奪われるというイメージはできてはいなかった。この日以降デザインを考える時に、自然環境と人工環境の関係を、そして「人間と未来」をシッカリ見据えていかなければならないとも思った。

私たち研究室では、被災地支援と災害への対応のためのデザイン・プロジェクトをDSCという考えで3月14日から提案し始めた。

### 2私たちは

「DSC: DESIGN for Safety & Crisis」

このプログラムは、時間軸の流れの上に Phase 1、Phase 2、Phase 3のそれぞれに沿っ て分割して考えている。この中には様々なアイ デアやビジョンがある。ここでは、その一部を 下記に紹介する。

### ●PHASE1:

発生時から2ヶ月までの第一段階で、その時 にあるものを使用して対応していく。

### 例えば

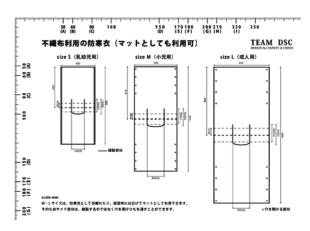
- ・サランラップやアルミホイル。不織布などを 利用して被災地の人の保温等の役に立つ「防 寒衣マットを作れるシート」を作る。
- ・今すぐ必要なものを集めて送付する。
- ・生理用品などの心理的にも即必要なもの。
- ・歯ブラシ(歯を磨かないと誤飲から口内細菌 が肺に入り肺炎を起こしやすく、非常に危険 な状態になる人や死亡者も出る可能性があ る。)
- ・トランプや雑誌、本、漫画などテレビやイン ターネット等電子機器に頼らない娯楽も必 要。ボードゲーム等を用意する。



國本 桂史

#### くにもと かつし

名古屋市立大学大学院教授。三菱自動車開発本部でパジェロ、デリカ、ミニカの開発に従事。Gマーク、PINUP CONCEPT DESIGN AWARD、Donggun Design Award等国内外の多くの審査委員、審査委員長を歴任。人工衛星から医療機器、都市計画まで幅広くデザインプロデュースを進めている。



不織布を利用した防寒衣マット用シート



余った衣類で作れるクッション

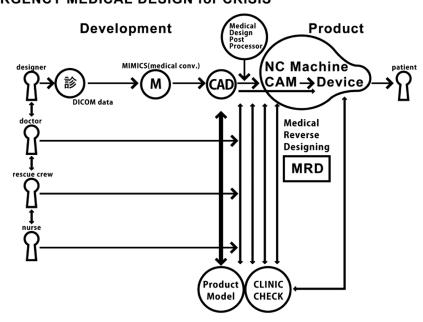


衣類で制作できるクッション

身体へのダメージを少なくし、保温に使用できるクッションを、衣類の中に衣類とウレタン材を緩衝材として入れて作る。この制作方法を案内する。

時間とともに必要になるプライバシー確保に簡易なパーテーションが、必要になる。

### **EMERGENCY MEDICAL DESIGN for CRISIS**



#### ●PHASE2:

・災害から3ヶ月~6ヶ月までの第二段階では、何かを組み合わせることで、役に立つモノを作る。アイデアに終わらず必ず作るということを進める。それ以降の災害・被災支援に継続的に利用できる計画を行なう。

そのために、このPHASE 2 の中ではさらに経過にそって進めるとことでSTEP 1、STEP 2、STEP 3 という段階をイメージしている。

#### OSTEP 1:

- ・電力使用料の少ないLEDランプの提供を台 湾の企業に協力依頼。
- ・四国の不織布メーカーに5ミリ厚の不織布を 提供依頼し、高齢者や乳幼児の体温を維持す るマットをデザイン設計。
- ・デザイン用品メーカー T社にマジックペンを協力依頼。段ボール箱を整理してメモや名称を書いたり、連絡用の紙にメッセージを書く 為のマジックペンやマーカーが必要。

### OSTEP 2:

・6ヶ月~18ヶ月までの第三段階で何かを組み合わせることで何か役に立つものを作る。

### OSTEP 3:

19ヶ月~36ヶ月までの第四段階で何かを組み合わせることで何か役に立つものを作る。

#### ●PHASE3:

被災地支援と産業インフラの検討を進める。 復興計画、都市インフラ共に産業再生と再建を 統合的に企画し、自然環境と人工環境を調和し た形で整備していく。 また地域と状況から発 生し形成されていく「文化」をどのような形で 将来に継承させるか、などを企画する。

## 3新しいビジョン

### ●文化を担う

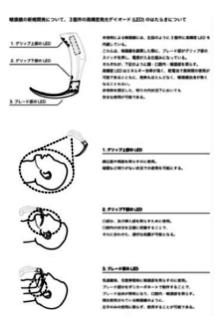
ここでは、文化の将来ビジョンや心理的機能 と物理機能の統合を扱う「カルチャラル・デザ イナー」、文化を形成する技術や科学を担う「カルチャラル・エンジニア」という新たなる活動を担う統合的なプロフェッションの誕生も考えられるだろう。

### ●医療を担う

DSCプロジェクトとしてのプログラムとして、安全や災害時に対する様々な企画・計画の中では、優先順位が高いものに医療及び医用機器のデザイン設計における新しい手法の確立がある。人間の通常生活時から災害緊急時までを包括して対応できる医療のための開発システムの検討・企画・計画そして実行が行われなければならないと考える。

医療機器は、長い間様々な状況への最適化対応の開発が行われずきている。こういう医療・医用機器をいかに、今あらわにされてきている新しい状況へ対応できる医療・医用機器に進化させていくかが急務である。100年間くらい進化してこなかった医療機器の一つの代表的な例として喉頭鏡がある。

ここに提示したのは、経済産業省の医療機器 の改良プロジェクトで開発している新型喉頭鏡 のデザイン例である。これは、災害時等の夜間 の暗闇の中でも気道確保や異物除去に機能する



機能をもつ。また施術者が操作ミスを少しでも 行わないような人間工学的な設計を行っている ため、今後の災害初期で必ず使用されていくで あろう医療機器の一つである。



使いやすく人体を傷つけない新型喉頭鏡 災害時、緊急時に気道確保に使用される

### ●私たちからの提案





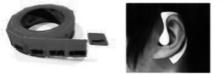


津波からヒトを守る 「警告・警報・誘導のプロダクト」



車内でトリアージ及び治療行為が可能な 大規模火災対応救急車



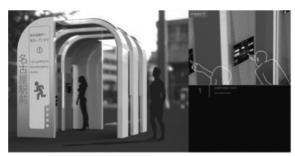


デバイスを用いてその場所に関する情報を付与した無線 IC チップを任意 の場所に貼り付け、イヤーレシーバーなどによって情報を受け取る。

### 災害時にも力を発揮する、 フレキシブルな音声標識



情報収集型音声標識ガイド





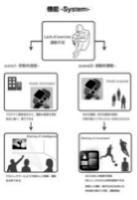






災害時に避難方法を教えてくれるバス停 避難支援システムの開発





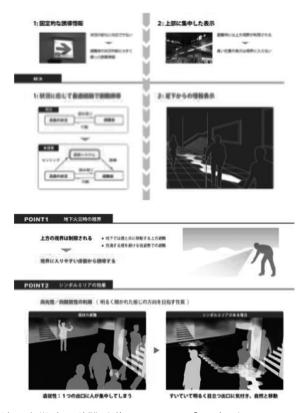
災害時での使用方法



運動促進デバイス



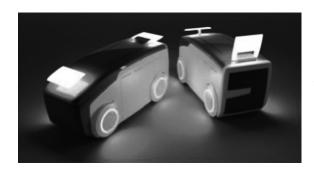
災害時において、運動が行われにくい状況になりやす いので、それを解消するデバイス。



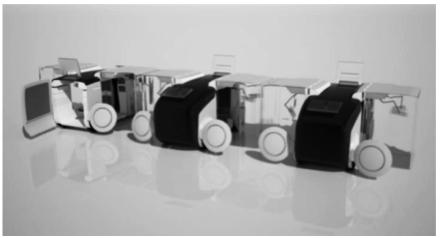
地下火災時の避難誘導システムのプロダクト



避難経路を示す信号機



夜間利用の安全を配慮したEV医療車両



連結で病院として機能

iMID(Integrated Medical Information Device: 統合医療診察管理デバイス)は全健康データを利用した医師の為の診察支援ツール。

現在EMR(電子カルテ:病院毎の診断データファイル)からEHR(個人の一生涯のHealthデータ(診療・薬剤記録・身体検査、人間ドックなど)のデータを管理するシステム)への期待が寄せられている。EHR下において医療機関が替わっても、統合的な診察・診断を医師ができるように支援するツール。

- ・個人(患者)の身体に関するデータを統合して 管理するシステムとそれをpersonalに医師 が利用できるデバイス。
- ・基本は医療機関で診察された各データをデータベース(SSDメモリ)に蓄積し利用する。WiFi、4G等を利用して自動的に更新される。
- ・個人識別:IDもしくは指紋等の生体認証によりデータとリンクして表示する。
- ・HAND: 手に持って見ることによる確認: 手にこのデバイスを持つことで、素早い情報確認を行い患者の状態をとらえることができる。
- ・SEE AR: 覗くことによる確認と診断:

強化現実技術(AR: Augmented Reality)を利用して、医療機関で診察し作成された個人医療データを、診察している患者と重ねて視ることにより、直感的にそして確実に疾患箇所を確認できる。詳細に診断ができる。

・PROJECTOR: 患者と診察結果や病状につい



て話す時や、治療方法の説明を行うときは小型プロジェクターとして利用する。

## 4 再生から未来創造へ

現在、世界には未来へ向けて進むにはあまりに多くの困難な問題や課題が山積みされている。これらの問題をしっかりと見つめて、それを正しく理解してヒトが幸せになれる方法で解決していくことで、「安全と災害」への対応が可能な先端的なデザインになると考える。そして、それが本質的なグリーンなセーフティデザインになると考えられる。

新しいビジョンである「スマートグリッド」は「インフラ」と「サービス」において、人間と社会、都市そしてそこに存在する機器や自動車に、いままでにない全く新しいつながりのカタチを持たせることことが出来るだろう。

ハイブリッドカーや電気自動車などのモビリティは、その社会サービスの中で、移動できる 蓄電装置としておおきな存在になるだろう。

「スマートグリッド」と「都市の未来」の関係としての統合された「インテグレーテッド・インテリジェンス・シティ」が構成されて、そこには新しいモビリティ像が必要になってくると考える。

そこでの、重要な要素は「エネルギー」管理 と「新モビリティ」利用である。モノの製造過 程の中で「廃棄物」の新しい捉え方も重要に なる。

「ゴミが全く出ない生産の仕組みで造られるモビリティ」や、「完全な再生材料としてのカタチを持つモビリティ」というものも考えられるだろう。燃費が良いということや、CO2やNOxの排出がないということだけではなく、造られる時から廃棄されまでの期間に環境負荷が、全くなく、ロングライフに使用できるということことも可能になり重要な要件になると考える。

そこから人間にとって心地よく、健康でいられるモビリティをも考えるべきだろう。それが安全で安心な災害対応できる人間の環境を作りだしていくであろう。私たちデザイナーは様々な視点から未来に向けて正しい行動をしなければならない、そして未来が単に快適ということに留まらずヒトが真に幸福になるようにデザインをおこなうことを始めなければと考える。



三菱APM:Automated Parson Mover 災害緊急時に、自動運航で安全性を確保



マスダール空港の自動モビリティー



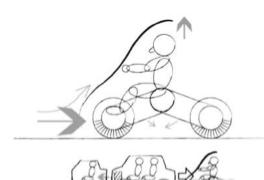
VolkesWagen XL 1 : hybrid car



VolkesWagen L 1:1 litter car 1Lで100キロ走行可能な超低燃費車



Next Generation EV: Kunimoto-Model 新しい災害に強い都市型交通を



Next Generation EV Cocept

### 災害から復興、そして再生から未来創造へ

ForumGebung:デザインは思想に適正な形態を付与しなければならない。そして私たち人間が新しく正しい選択を行えるようにしなければならないと考える。

# 風景の防災力

東京大学生産技術研究所 講師 川添善行·都市·建築設計研究所 川添 善行

# 矛盾する私・矛盾する建築

他の人はどうだかわからないが、私は矛盾した存在である。夜遅くまで大酒を飲みながら騒ぎたいと思えば、健康が大事だと思いたち、家の近所を気休め程度に走ってみたり野菜ジュースを飲んでみる。不思議に思うのは、刻一刻と移り変わる自分の感情は常に多くの矛盾に満ちているのに、私という人格は今のところ何らかのまとまりを持って存在しているようにみえることだ。こうした矛盾に満ちた私自身と同じように、建築というものも、相反する2つの価値とは、ローカリティとユニバーサリティ。本稿は、風景とそれを構成する建築が、このふたつの価値の間でいかに実現し、存在しているかの考察である。

建築とは、ある特定の場所に建つ。その場所には特有の気候があり、その周辺には特定の文化を有する人々が暮らしている。そして、その圏域で手に入れることのできる材料がある。ローカリティとは、建築においていかに場所性が発現しているか、そして、それがいかに建築を構成するかという視点である。

同時に、建築とは人々の意志や考え方の現れである。もちろん、建物を物質の構成の術であったり、種々の制度の結実とも見ることはできる。 ただし、それだけでは、建物をある一つのかたちに結晶化することはできない。建物のかたち が、無数の可能性の中から、ある一つのかたちへと落とし込まれるためには、そこに人間の意志が必要となるのである。そして、その人間の意思に連動する空間とは、時にある種の精神性を帯びており、そこには人類共通の美意識や崇高さ、宗教性といった普遍性、つまりはユニバーサリティが存在している。それ以外にも、権力的な志向や、虚栄心、潜在的な傾向、そうしたものが意識的であれ、無意識的であれ、直截に反映される。その建築の特性は、だからこそ歴史的にも利用されることが多かったし、巧みな為政者ほどその特性の利用に早くから気づいていた。

建築とは、このようにローカリティとユニバーサリティという2つの相反する価値の中に存在する。筆者のような建築家という職能は、文字通り建築を設計することを職能とするが、その行為とは現在という時間における2つの価値を、ある器の中に封じ込め、未来へと照射する作業とも捉えることができる。



# 川添 善行

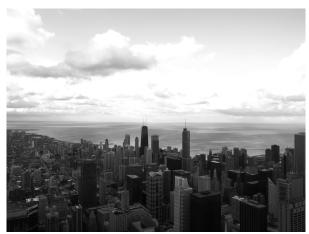
1979年神奈川県生まれ。東京大学工学部 建築学科卒業。オランダ・デルフト工科 大学、東京大学景観研究室助教、などを 経て、現在、東京大学生産技術研究所川 添研究室(建築学専攻)を主宰。専門は、 建築設計、風景論。2007年より川添善行・ 都市・建築設計研究所を主宰し設計活動 を展開。工学博士。

## インターナショナルスタイル

20世紀の社会とは、いったいどのようなも のであったのか。その議論のためには、20世 紀の建築と都市がどのような特徴を持っていた のかを議論することが有効である。20世紀の 建築と都市を特徴づけるものは、一般にイン ターナショナルスタイルと呼ばれている。イン ターナショナルスタイルとは、20世紀初頭に 提唱された概念であり、個人や地域の特徴を超 えて、世界的に共通の様式(スタイル)を目指 し実現してゆこうとするものである。そして、 そのインターナショナルスタイルによる建物が 立ち並ぶことによって近代的な都市が形成され るはずだ、という思想である。このインターナ ショナルスタイルの背景にあるのは、気候や民 族といった地域差を克服し、人類の普遍性や文 明の進歩を実現するべきであるという思想であ る。言い換えれば、インターナショナルスタイ ルというある特定の技術によって、従来の「前 近代的」因習を乗り越えることができると考え た。このインターナショナルスタイルという思 想と建築様式は、度重なる戦争による一時的な 中断はあったものの、時代の空気を的確にとら えていたこともあり、世界的な建築・都市の潮 流となった。

このインターナショナルスタイルとは、建築の持つ2つの価値のうちのユニバーサリティの側面のみが強調されたものであった。はたして、それはなぜであったのか。それは、20世紀という百年のもつ時代性と密接な関係がある。20世紀とは、私たちにとって工学というものが大きな発展をした時代である。ローマ帝国の頃から使われているコンクリートという材料が、一定程度の引張荷重にも抵抗することので

きる鉄筋コンクリートとして建物に使用できるようになった。また、炭素含有量が多く強度はあるものの脆いという性質から、従来、鋳鉄は構造体としてひろく使用されることはなかったが、炭素含有量を低下させることのできた鋼鉄の誕生によって、鉄を使った建造物も多く生み出されることとなった。従来の限界を克服できる技術の発明により、私たちの工学は地域差を乗り越え世界全土を覆うことのできる普遍性を獲得したかのように思われた。つまり、その普遍性を指向した科学技術とその思想としての工学は、地域差の克服を目指したインターナショナルスタイルという思想と表裏一体なのである。



近代建築発祥の地シカゴの都市風景

# 工学の限界

2011年3月11日に発生した大地震とその後の津波によって、私たちの社会は大きな転換期を迎えることとなった。筆者は、震災後間もないころから調査で現地に入り、その後も自治体の復興計画の手伝いをしている。そこで目にしている現実は、ローカリティという価値の側から、建築・都市のあり方、ひいては工学というもののあり方に対して強い異議申し立てが行わ

れているということに他ならない。

そもそも工学とは、過去の(自然)現象に応 じて入力値を設定することから始まる。そして、 その入力値に対して望ましい解を得るための手 段を構築するための学問である。工学の体系は、 科学技術の発展とともに多様化・精緻化したも のの、その出自から過去の履歴に基づく経験工 学であることに変わりはない。そして、工学は 過去の経験に基づくが故に、個別性を乗り越え た普遍性を目指すことが運命づけられている。 だが、その普遍性への指向が、ややもすると個 別解への対応という点で齟齬を来したことが、 今回の震災で明らかにもなった。岩手県の三陸 地方と宮城県の仙南地方、そして福島県とでは、 津波の波形も異なれば、被害のメカニズムも大 きく異なる。人口や経済など社会的状況も異な る。被災の地域差があれば、復興の地域差も存 在するのである。各地で地域共同体のあり方を もう一度見直そうという動きがあるのも、こう したローカリティという価値から地域社会への 揺り戻しであると考えれば理解も容易だろう。



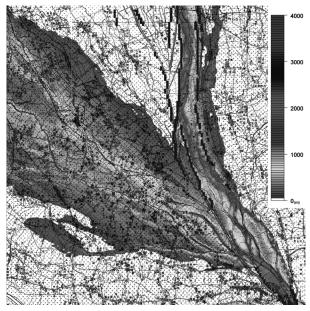
東日本大震災の津波被害

# 風景のもつ防災力

しかしながら、現代ほど科学技術が発達する 以前からも、ローカリティの発現の仕方には 様々な形態を見ることができる。現在、筆者は 東京大学川添研究室を主宰しているが、昨年の 3月まで在籍した景観研究室では、数年来、防 災景観論というテーマの研究を続けてきた。

例えば、私たちがある風景を見て、美しいと 感じる。その美しいという感情が何によっても たらされるのか。その美しいと感じるメカニズ ムを考察することが景観研究という学問であ る。美しいと言われる風景の背後には、必ず何 らかのルールなりシステムが存在する。それは、 運河や掘割のように水のコントロールのシステ ムであったり、棚田のように地形勾配と田の収 穫量のバランスだったりするだろう。防災景観 論ではとりわけ、その風景の成り立ちを災害に 対する防御の構えとして説明する。

例えば、田中毅(08年度東京大学大学院修士論文、現在(有)eau勤務)が研究対象とした富山の常願寺川は、日本でも有数の急流河川である。川が山間の谷地形を進み扇状地へと抜けるあたりで河川勾配が変わるため、洪水が多発していた。この洪水多発地帯の集落の立地を調査してみると、住居は石垣で囲まれ、一軒一軒の住戸は分散して配置されている。この特徴



常願寺川扇状地における氾濫解析(作成:田中毅)

的な風景の背後には、いったいどういうメカニ ズムがあるのだろうか。

防災景観論の視点からみると、この風景も災 害に対するなんらかの防御の構えであるという 仮説が成り立つ。このエリア一帯で河川洪水の 氾濫解析を行ってみると、住居が無作為に分散 的に立地しているように見えるが、そのいずれ の立地もちょうど1m程度の浸水被害に遭うエ リアであることが分かった。つまり、過去の災 害による被害の履歴が、地域固有の知恵となり 伝承され住居配置の見えないルールとなったの だ。そして、この1mという浸水深さは住居の まわりの石垣とほぼ同じ高さであり、1mの浸 水を住居のまわりの石垣で防いでいたことにな る。つまり、日常の生活を営む上では、人々は 川の近くに暮らし、水の利便性を享受したい。 ただ、災害時のことを考えると、水から遠く暮 らし自分の身と財産の安全を確保したい。この 1mという浸水の深さの受容と石垣の構築、一 戸一戸の住居配置の見えないルール、さらには 結果として生まれる地域の風景は、水の利便性 の享受と水害からの安全性の確保という微妙な バランスの上に成立しているのである。

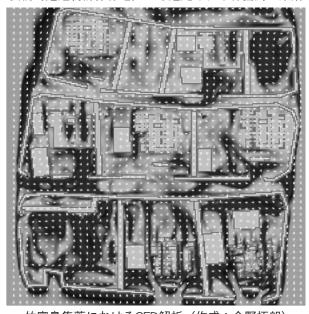
さらに私たちは沖縄県竹富島でも調査を行った。竹富島は、沖縄本島からさらに南西に 400km離れ、亜熱帯の気候帯を属している。 夏には台風の通り道ともなり、秒速70mの瞬間風速も記録されたほどだ。つまり、普段の暮らしの中では暑さをしのぐためにも通風の利用を図る必要があり、一方で、台風時の強風から自分たちの身を守らなくてはならない。ちなみに、竹富島は重要伝統的建造物群保存地区に選定されるほど、古いまちなみを残している。赤瓦、珊瑚の石垣、常緑樹のフクギなど、特徴的な景観要素によって構成される伝統的なまちな

みが、風の利用と防御という点でどのような役割を果たしているのか。エアコンや気密性サッシュなどの科学技術が導入される以前、人間と環境はどのような関係性を築いていたのか。そのことを解き明かしたいと考えた。

当時学生だった金野拓朗(10年度東京大学大学院修士論文、現在(株)オリエンタルコンサルタンツ勤務)と三浦詩乃(09年度東京大学卒業論文、現在東京大学大学院)とともに現地に滞在し、調査を行った。まず、現在の竹富島の集落の実測調査を行い、その後、この集落空間の中で空気がどのように動いているのかを明らかにするため空気環境CFD解析を行った。



伝統的建造物群保存地区にも選定される竹富島の集落



竹富島集落におけるCFD解析(作成:金野拓朗)

一連の調査の結果から、竹富島の景観が風の利用と防御を両立させていると説明することができる。さらに、前記のような赤瓦、石垣、樹木という竹富島に特有の景観要素が、それぞれバラバラに風の調整機能を果たすのではなく、互いに補いつつ連動しながら、つまり風景としての一体性をもって風に対しての効果を発揮していることが分かっている。ここで取り上げた常願寺川扇状地の分散的な住居の配置と石垣による風景や、竹富島の風の利用と防御の働きを有する伝統的まちなみなどはきわめて特徴的な例ではある。さらに、この他にも各地に必然的な地域性を獲得した風景が存在する。この必然的地域性とは、ローカリティの発現の仕方を考える上での重要なヒントとなるであろう。

# 吉浜というヒント

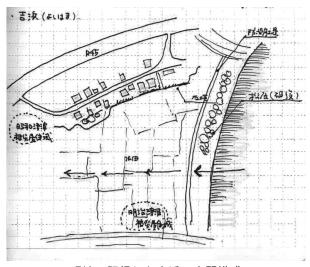
5月のはじめ、東北の被災地をまわっている際にある集落にたどり着いた。岩手県大船渡市にある吉浜である。他の地域と同様に、この集落でも海岸沿いに築かれていた防潮堤は無惨に破壊されていた。大きなコンクリートの固まりをなぎ倒す力はただただ息をのむばかりである。しかしながら、この吉浜が他の地域と大きく異なっていたのは、当時この集落での人的被害が漁具を見に行った一名の方の行方不明だけであったということである。さらに、この集落の家々では数軒の床上浸水が報告されたものの、壊滅的な被害を受けた住居は見当たらない。この集落では一体何が起こったのであろうか。

筆者が現地で記録した図にもある通り、この 吉浜の集落の立地にはいくつかの意図を読み解 くことができる。図中、右側が海であり、津波

は右から左の方向へと流れてくる。万が一、津 波が防潮堤を乗り越えてきた場合、図の中央付 近に浸水するわけであるが、集落の土地利用の 中でこの一帯は水田・農地と定められ、人が住 む住居は農地の周囲の一段高い場所に立地して いる。そして、その住居の近くには国道45号 線という道路が通過しており、いざというとき の避難経路も確保されている。この空間構成の ため、吉浜では今回の津波によって田畑は甚大 な被害を受けたものの、住居には大きな被害が なかったというわけである。ただし、こうした 知恵は、集落が形成された当初から計画されて いたわけではない。この集落は、1896年の明 治三陸津波で大きな被害にあい、当時の居住地 の位置を変更した。その四十年後の1933年、 前回の被害をふまえ移転したはずの居住地も昭 和三陸津波で被害にあい、さらに居住地の位置



5月に撮影した吉浜の様子



現地で記録した吉浜の空間構成

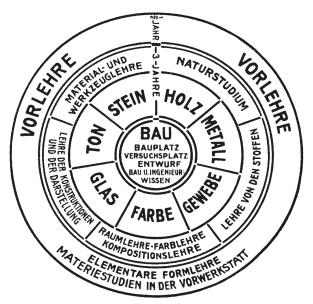
を変更した。被害とそれへの対応の積み重ねが、 現在の集落の空間構成の骨格として残っている のである。私たちが、この吉浜という集落から 学ぶべきことはいくつもある。まずひとつは、 土地利用を含めた総合的な計画の重要性であ る。堤防を作るだけでなく、道路を配置するだ けでなく、建築を設計するだけでもなく、その 一つ一つが連動することによって、地域全体の 防災力を向上させるという思想である。二点目 は、自然災害に対する明確な被害の設定である。 吉浜では、防潮堤が津波によって破壊された場 合、農地のエリアは津波の直撃を受けることが 予想されていた。住民自身も渋々ではあろうが、 その被害を受容する覚悟があったということだ ろう。ただし、それと引き換えに自分たちが住 む家々への被害は避けようとする意図が読み取 れる。どこまでの被害を受容し、どこを守るの か。明確な被害設定と受容により、人的被害を 最小限に食い止めることができた。三点目は、 工学への想像力である。どのようなものを作る 場合であれ、エンジニアは万全を期す。ただし、 その前提となる入力条件が想定を上回る場合、 その工学は想定とは異なる結果を残すことがあ る。入力条件の変化と工学の限界に対して、ど れくらいの想像力を持てるのか。工学に対して、 どのように想像力を付与するのか。そのことを 私たちは課題として、そしてヒントとして受け 取らなくてはならない。

# 建築の力

話をローカリティとユニバーサリティの議論 に戻そう。ここまで、さまざまなかたちのロー カリティをみてきた。一方の建築のユニバーサ

リティの考察には、従来からもいくつもの方法 が提示されており、たとえば美学という分野は その代表的なものであった。ギリシアの比例(プ ロポーション) やゴシック建築の空間性など、 美学は対象の中から抽出する普遍的な美しさの メカニズムを探求する。近代になってからは、 急速なメディアの発達により、建築のユニバー サリティは敷衍されてゆく。特に、20世紀に おける建築のモダニズム運動は、歴史上で最初 の世界規模での同時的建築運動となった。そし て先述の通り、3・11の震災を境に、工学の あり方そのものが根底から問い直されている。 新しい工学に求められるものとは何か。それは、 想像力をもった普遍性の獲得に他ならない。過 去に経験したことのない状況にも持ちこたえる ことができる技術。新しい時代を切りひらき作 りだすための工学。この新しい工学という視点 から、もう一度ユニバーサリティの検証を行う べきである。

かつて、バウハウスという建築・美術の学校がドイツに存在した。ナチスによる迫害もあり、 わずか14年足らずしか存続しなかったが、バ



バウハウスにおける教育カリキュラム

ウハウスの思想と輩出した人材は、20世紀の デザインのあり方に非常に大きな影響を与え た。バウハウスは、当時まさに隆盛を迎えよう としていた科学技術、とりわけ生産技術の劇的 な向上に注目した。大量に生産される製品だか らこそ、より多くの人々の生活に貢献できる。 バウハウスの着想はここにあった。一つのデザ インが大量に生産されるマスプロダクトの時代 におけるデザインの役割とはいかなるものか。 バウハウスも、彼らなりの文脈の中でローカリ ティとユニバーサリティの間で建築のあり方を 模索していたのだといえるだろう。そのバウハ ウスのカリキュラムを表わす図がある。同心円 で描かれた図の中で周辺にあたる円弧の部分に は、金属加工であったり構造であったり材料で あったりと、生産技術の各ジャンルが相当して いる。そして、その中心に書かれているのが、 BAU つまり建築である。建築とは統合する知 である。建築がもつ、この統合するという力。 この建築の力は、ローカリティとユニバーサリ ティを結びつける紐帯としての役割を果たして ゆくはずだ。

ひとりひとりの暮らす住居は、それぞれ異なる。家族も違えば、そこに暮らしてきた思い出も一つずつ異なる。ただ、インターナショナル

ローカリティとユニバーサリティ

スタイルの洗礼を浴びた近代的な建築家や都市計画家が作り上げたまちは、実際どれも同じような様相を呈してしまった。私は、ローカリティとユニバーサリティの価値を対峙的に、二項対立の中で理解しようとするのではない。ローカリティの再発見とユニバーサリティの検証の先に、新しい建築や都市のあり方が存在しているのではないかと思うのである。例えば、防災景観論で目指したことは、風景のローカリティに説明を与える作業であった。それも、「個性的であることが素晴らしい」というような押し付けがましい固有性ではなく、必然的な地域性の説明を可能にするべきであるのだ。

今、私たちの国土やいくつもの都市、それぞれの集落は、復興への歩みを進めている。復興計画の現場は生き馬の目を抜くかのような喧噪ぶりである。ただし、時間がないことを理由にして前世紀のような標準設計をひたすらに繰り返すだけの地域創出を行うのではなく、かといって牧歌的な地域共同体への幻想に身を沈めるのでもなく、今だからこそできるローカリティの再発見とユニバーサリティの検証の先に、これからの建築・都市のあり方を見つけ出さねばならないと考えるのである。

# 応援します!東北! 応援します!陸前高田市!

名古屋市総務局総合調整室 主幹(被災地支援) 加藤 誠司 陸前高田市復興対策局技師(名古屋市派遣職員) **阪野** 武郎

## 1. 陸前高田市への支援

(加藤 誠司)

平成23年3月11日に発生した、東日本大震 災に対し、名古屋市では、被災者の受入れ支援 や国からの派遣要請に基く被災地域支援に加え て、壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市へ の支援も行っています。

総務局総合調整部総合調整室は、消防局防災部防災室とともに3月16日に設置した「名古屋市被災地域支援本部」の事務局を担っており、1月末までに延べ134人の職員を陸前高田市役所に派遣し、陸前高田市の職員や岩手県内の自治体と一緒になって陸前高田市の行政機能回復に努めています。そのほか、産業支援や交流(陸前高田の中学生を本市に招待)も行ってきました。

### (1) 陸前高田市支援の決定過程

名古屋市では、被災直後から被災地の応急復旧のため、緊急消防援助隊、上下水道の復旧隊や医療救護班を送り込んでいました。(1月末までに延べ1,056人派遣)

このような活動とは別に、行政機能が麻痺している被災市町村があれば、その回復のために本市が力を貸せるのではないかと、3月19日から現地調査のために先遣隊を岩手県内に派遣しました。被災して混乱している自治体に要請

もないのに出向いても足手まといになるのでは ないかといった不安を持ちつつも出かけました。

私は第二次先遣隊として3月22日に岩手県内に入りました。花巻空港で第一次先遣隊から引き継ぎを受けている時に震度3くらいの地震があり、先行きに不安を感じましたが、宮古市以南の沿岸北部を調査した一次隊からは「地震なんていちいち気にしていられませんよ。すぐに慣れますから。」と。確かに岩手県内に滞在した4日間に地震を何度も感じました。

また、一次隊からは「沿岸部は内陸部とは違い、軒並み壊滅的被害を受けている。地震というよりも津波被害が甚大。沿岸部に行くといき



# 加藤 誠司

名古屋市総務局総合調整部主幹。名 古屋開府400年記念事業に続いて名 古屋市被災地域支援本部の事務局と して陸前高田市支援を担当するほ か、学生が自由な発想に基づいて伸 び伸びと活動する街「学生タウンな ごや」の推進等に関わっている。



# **阪野** 武郎 ばんの たけお

陸前高田市復興局技師(名古屋市から派遣員)。ゼネコン、広告代理店勤務を経て名古屋市役所に入庁。市街地整備、まちづくり、高速道路整備などに携わる。名古屋市の陸前高田市復興支援の一環で、2011年5月より陸前高田市復興対策局に派遣勤

務。震災復興計画の策定業務を担当。

市の復興という、大きな使命を与えられ、住民説明会などに奔走。

なり目を覆いたくなる状況に変わる。」と聞きました。しかし、テレビで見た光景も目の前に広がるまでは現実感がありませんでした。

初めに訪れたのは、岩手県庁です。環境生活部を訪問して本市からの物的支援について回答をいただいた際、「保健福祉部が話をしたいことがあると言っている。」と繋いでくれました。保健福祉部からの話は「陸前高田市から『保健師がいなくなってしまい大変困っている』という話が来ている。陸前高田市の健康推進課長に会ってもらえないか。」というものでした。これがすべての始まりです。

この時はまだ分かっていませんでしたが、今回の震災で庁舎が全壊し職員も失い、かつ市街地が壊滅状況になった市町村は、岩手県内では陸前高田市と大槌町、宮城県内では南三陸町の3市町です。陸前高田市が岩手県にSOSを発信したことが今日に繋がったのです。

翌23日、陸前高田市でヒアリングと現地視察を行いました。陸前高田市には大船渡方面から入りました。大船渡市内も沿岸部は被災していましたが、陸前高田の比ではありませんでした。陸前高田はまちごと消えていました。市街地は道路を除いては瓦礫で埋め尽くされている上、建物は根こそぎ流されおり、鉄筋鉄骨の建物の外観がいくつか残っているだけで、空襲を受けたまちの姿と重なりました。市役所も全壊しており、職員もかなり被災されたことが想像できました。

市街地を経由して災害対策本部が置かれた高台の給食センターに向かいました。健康推進課長に会えましたが、騒然としており、話を聞ける状況にありませんでした。そこで、前日に設置されたばかりのコンテナハウスが並んだ仮設



全壊した陸前高田市役所



全壊した陸前高田市役所



陸前高田市災害対策本部となった給食センター

市役所に移動してやっとのことで話を伺えました。丁重にあいさつをいただいた後、「多くの保健師が亡くなるか、行方不明になっており、仕事が回らない。避難所を巡回する保健師は全国から来てくれているが、私どもは市役所内に入ってもらえる保健師を必要としている。助けていただけるのなら一日も早くお願いしたい。」と話されました。職員を失くしたのは健康推進課だけではなくほとんどすべての部署だということも聞きました。都市計画課長からも話が聞けましたが、有望な若手2名を失い茫然自失の状況でした。背負えるだろうかと逡巡しましたが、「何とか力になりたい」という思いが消えることはありませんでした。

翌24日は陸前高田市への職員派遣を想定して、どこに拠点が置けるのかを調査し、第三次先遣隊に引き継ぎました。第三次先遣隊も精力的に調査を行い、名古屋市被災地域支援本部ではこれら調査結果を踏まえて陸前高田市への支援に向けて詰めの作業に入りました。

4月1日から3日にかけて、住田副市長をトップとする調査チームが現地入りし、岩手県や陸前高田市と打合せを行い、翌4日に開催した本部会議(市長が本部長)で調査チームが陸前高田市への支援を提案し概ね了承されました。これを受けて、河村市長から達増岩手県知事と戸羽陸前高田市長に対し、支援の方針を伝え、最終確認をとった上で、同月7日に開催した本部会議で陸前高田全面支援の方針が正式決定されました。

### (2) 職員派遣の検討経過

先遣隊などの事前調査は名古屋市が独自に派遣しましたが、職員派遣自体は総務省のスキームの中で行っています。

3月30日になって全国市長会から「東北地方太平洋沖地震派遣に係る被災市町村にする人的支援のための職員派遣(依頼)」の照会がありました。震災直後、被災市町村は応急対応に振り回されてしまい、応援してほしい業務メニューを出す余裕がなかったと推測します。名古屋市はこの照会に対して「陸前高田市を全面支援」する旨回答しました。回答後、陸前高田市からは、1日も早く来てほしいという要望がありました。

派遣職員の人選のため、業務の中身を聞く必要があったことから、2回にわたって調整隊を派遣しました。4月7日から9日にかけ、先陣を切って同月22日から派遣する職員が担う主に福祉関係の業務調整のための第一次調整隊を、11日から13日にかけては、5月11日から派遣することになる職員が担う福祉以外の業務調整のための第二次調整隊を派遣しました。陸前高田市災害対策本部になっていた給食センターの一室を借りて、本市と陸前高田市、全体を総括している岩手県の3者間で調整を行いました。陸前高田市の側からこういうことをやれる人が必要という話があり、こちらからいろいろ質問をして、イメージを固めて持ち帰った上で、各局で人選を行いました。

### (3)職員派遣の状況

陸前高田市へは、1月末現在、23人の職員を派遣し、会計、企画政策、学校建設の施工管理などの業務に陸前高田市役所の職員と同じように従事しています。陸前高田市役所では、295人の職員(市長を除く)のうち、68人が亡くなるか、行方不明となりました。陸前高田市は、他の自治体に職員派遣を要請するにあって、何人の職員が必要なのかを内部で検討し、五十



名古屋市の派遣職員(現地連絡事務所前にて) 数人に絞り込まれたそうです。ちなみに、本市 は33ポストに職員を派遣しました。

陸前高田市では市のプロパー職員と名古屋市 及び岩手県内自治体から中長期で派遣された職 員で通常業務を行っており、臨時的に人が必要 となる業務をその他の自治体から短期で派遣さ れた職員が行っているという形になっています。

職員派遣に係る経費について、7月から、派遣期間が3カ月間を上回る長期派遣職員に係る経費は、地方自治法第252条の17に基づく派遣(以下、「自治法派遣」)とみなし、陸前高田市が負担することになりました。派遣期間が3カ月間に満たない職員は出張扱いとして、名古屋市が負担しています。

自治法上は派遣期間の定めは特にありませんが、陸前高田市に派遣されている岩手県職員の1ポストが3カ月間となっており、それを基準として、3カ月間以上の派遣は自治法派遣にするということで整理しました。名古屋市も3カ月間以上の派遣は自治法派遣に切り替え、最終的には16ポストが自治法派遣に切り替わりました。

それ以外のポストは、基本的に1カ月以上の ローテーションを組み、現地で新旧職員が1日 引き継ぎを行う形で、交代で入っています。例 えば、住民票の交付業務は1カ月ごとに16あ る区役所から職員が入っています。

9月に入り、来年度の職員派遣について岩手県を通じて要請があり、来年度も引き続き派遣要請を受けることを本部会議で決定しました。 9月に実施した市民ネット・モニターでも継続支援に賛同される声が9割近く寄せられています。市議会からも、いち早く東日本大震災の復興支援に従事する本市職員の激励に関する決議をいただき、身が引き締まる思いです。本市は、陸前高田市の復旧・復興の道筋が確かなものになるよう支援してまいります。

### (4) 現地の支援体制

本市では、陸前高田市への派遣職員の後方支援や各種連絡調整のため、一関市大東町摺沢(すりすわ)にある職員の宿泊施設(富二屋旅館)に現地連絡事務所を併設しており、名古屋市役所内に設置されている被災地域支援本部の職員が立ち替わり現地に入っています。8月までは、摺沢の現地連絡事務所のほかに、岩手県庁にも詰めていましたが、現在は摺沢の現地連絡事務所を唯一の拠点として活動しています。(来年度は陸前高田市内に移す予定です。)

旅館だけでは職員が泊まれないため、近くの 民家3軒も借りて生活しています。旅館の女将 さんが分け隔てなく接してくださるため、派遣 職員はみな感謝しています。今回の支援活動の 源は、ここ富二屋旅館にあると言っても過言で はありません。また、民家などの契約をする際 には、一関市役所大東支所と一関商工会議所大 東支所の方にもご協力いただきました。私自身 は活動のサポートのため、これまでに延べ80 日間ほど現地に行きましたが、被災地支援のた め派遣されている本市職員が地域の皆さまに支 えられているとも感じております。



被災直後の仮設陸前高田市役所



現地連絡事務所と職員の宿泊施設(富二屋旅館)

# 2. 長期派遣への応募と復興 計画の策定

(阪野武郎)

### (1)長期の被災地派遣へ

名古屋の被災地派遣が決まったのは、4月に入ってからですが、それ以前から、これだけの 震災となれば被災地への支援派遣があるのだろ うとは思っていました。しかし、初期の段階で 必要とされるのは、消防や上水道、保健などの 分野であり、あまり自分には関係ないと思っていたのですが、予想外にも職場内で被災地派遣に関する意向確認が回ってきました。ただし「復興計画策定関係事務」の職務で、計画系の仕事を全く経験したことがないのでどうかな、と思いつつも、安全で快適な社会資本を整備することを使命とする土木技師にとって、被災地復興に携わることは貴重な体験になると考え、確認書には迷わず「希望する」と回答しました。

その後、自分が候補に挙がったことを知らされ、喜んだのもつかの間、翌年3月までの長期派遣になることを聞かされて、非常に悩みました。まだ子どもが小さく、育児の負担を全て嫁に求めるのは厳しいかなと思いながらも、一方では、家族を失ってもなお懸命に職務を遂行する現地職員に同じ自治体職員として非常に感銘し、何かしらの役に立ちたい気持ちが強くなり、また、この未曾有の災害復興に携わることは、いつか子どもに誇れるのではと考え、派遣に応じることを決めました。

技術屋として、自治体職員として、そして親として決めた判断は、決して間違ってなかったと今では強く思っており、他に代えがたい貴重な経験、勉強をさせていただいています。これは家族の協力や支えがあるからこそ出来たことであり、家族にはとても感謝しております。

### (2) 現地での生活

ここでは、古い空き家を借りて、多い時で総勢7名のハウスシェアリング生活をしています。生活サイクルが同じであるため、トイレや風呂、洗濯といったものが集中しがちで不便ですが、話相手に不足はしないため寂しさを感じることはなく、予想していたよりは楽しい日々を送っています。

通勤は、皆一緒にバスに乗って約1時間の山道を走ります。カーブが多いため、ときどき車酔いになることが難点です。食事は、お世話になっている旅館のおかみさんが丹精こめて作ってくれて、お世辞抜きでとても美味しく頂いています。

残念なのが、陸前高田市の職員との交流がな かなか取れないことです。自分たちの生活拠点 が職場から1時間近く離れている一関市大東町 だからということもあるのですが、大きな理由 としては、やはり市内の飲食店等がほとんど流 出してしまっているからです。自分自身の道路 公団や本省外郭団体に派遣された経験から、仕 事を充実したものにするためには、そこでの良 好な人間関係は重要なポイントであり、仕事外 での付き合いは大きな効果をもたらすものと感 じています。少ない機会ですが、職員のお家で お酒を交わすことがあり、貴重な時間として楽 しく過ごすのですが、隣室にある家族の位牌を 見ると、ここの職員のほとんどが震災により家 族を失っている現実を再確認させられ、被災地 で働くということは、こういったことを全て直 視していくことだと改めて考えさせられます。





左:現地での打合せ(雨の日以外は「青空会議」) 右:陸前高田市震災復興計画検討委員会の様子

### (3) 陸前高田市震災復興計画

私の仕事内容は、復興計画策定に関する事務 全般となっております。これまで計画系の仕事 に従事したことがなく、当初は自分なんかで務 まるのか不安でした。そのため、気持ちだけは 負けないようにと何でもやるつもりで来たら、 本当に何でもやることになりました。都市計画 から土地利用再編、土地区画整理、防災集団移 転、宅地造成、都市公園など、幅広く携わるこ ととなり、日々勉強の毎日を過ごしております。

### 1)体制

私が所属しているのは復興対策局で、当初8名のメンバーで構成されていたのですが、ほとんどが他部署との兼務となっており、純粋に復興計画業務に従事できるのは、自分含めて3名だけでした。復興に関する部署がこんな少人数なのかと疑問に感じたのですが、発災から2ヶ月程度しか経っていない当時では、前年度の会計処理や流出したデータの復旧作業など、目の前にある従来業務で目一杯で、その先にある復興計画に関するところまでなかなか人員を配置することができないのが現実だったと思います。

また、技術職は自分だけだったので、おのず と自身の役割も知ることができ、様々な文献や 資料に目を通しながら、土地利用の方向性や各 種事業のスキームなどの検討に時間を費やして いました。

### ②計画策定までの流れ

青年会議所、商工会、婦人会など市内主要団体の代表者等で構成される総勢50名からなる計画検討委員会により復興計画の検討が進められました。その間、市民アンケートを2回実施して、市民の住宅再建の意向を把握するとともに、まちづくりのあり方についての意見も集約しました。また、復興計画の素案を市民に説明して、意見や反応を伺う地区別市民説明会を10月に市内全11地区で開催したのですが、い

ずれの会場もほぼ満員の状態となり、市民の関心の高さが伺えます。

市民説明会は冒頭に犠牲者への黙祷から始まることもあります。残された者たちの使命と責務を強く感じます。また、ここで驚いたのが、厳しい意見や指摘が出るものの、説明会が終了する際には市民から拍手を頂き、また会場の片づけも市民が積極的に手伝ってくれたことです。自分自身、名古屋で何度も説明会には参加したことはあるのですが、叱咤で終わることはあっても拍手で終わった記憶はなく、今回のことはとても新鮮で、感動すら覚えました。おそらく、それだけ復興に対する市民の期待が高いということであり、身が引き締まる思いでした。このようなプロセスを経て、12月の市議会において議決を頂き、陸前高田市震災復興計画が策定されました。

### ③事業化に向けて

これからは、復興計画を実現化しなければなりません。時を同じくして、政府において復興特区関連法案及び第3次補正予算が成立されました。遅いと言われながらも出そろった復興へのツールをどう活用していくか、これからは地方の動きにかかってきます。陸前高田市においても、早急に復興を進めていくため、規制緩和や税制特例を活用できる「復興推進計画」や土地利用の規制、手続きを処理できる「復興整備計画」、そして様々な事業を地方負担ゼロで実施できる「復興交付金事業計画」を作成するべく、検討を進めております。

### (4) 現地(被災地)で感じること

被災地復興に携わって9ヶ月経ちましたが、 強く感じるのはリーダーシップの重要性と復旧 から復興、であります。市役所が行政機能を失い、市街地がこれまで無残に被災されてしまったこの地において、市民は絶望を覚え、職員も不安を抑えながら職務に忙殺される日々でした。この状況を打開するには、市民には期待や夢を、職員には活力を与えるリーダーシップが不可欠であり、今日より明日、明日より明後日を生きる糧となるメッセージを発信していくことが重要であり、陸前高田市の戸羽市長はその役割を大きく果たしていると思います。そして、被災したまちを甦らせるには、復旧ではなく復興であることが求められます。元のまちを一日でも早く戻したいとする気持ちは強く、ややも



市民説明会の様子



市民説明会 会場からあふれる人たち

すれば復旧になりがちなのですが、ここで復興 に転じるか否かで都市の発展は大きく変わって きます。そのためには、被災により顕在化した 課題の対応をそこで初めて検討するのではな く、従前から潜在している課題を掘り起こして 向き合い、その対応や対策を検討しておくこと が、被災後における復興を実現化する大きな要 素になるのではないかと感じています。

3. 陸前高田市支援からの学び (加藤誠司)

陸前高田市への長期職員派遣を含め、被災地 支援に取り組んできた経験を踏まえて、今後、 自治体間での協力・連携が一層必要であると考 えます。

8月22日に大規模災害時の支援にかかる指定都市市長会議が開かれました。その際に名古屋市は、陸前高田市への支援の経験を踏まえ、「指定都市が支援を行う場合においても、国や県の定めたルールに則り国や県と緊密に連携をとりながら、あくまで地域のサポートとして支援を行う姿勢が大切である。また、職員の派遣にあたっては、中長期的に継続して職員を派遣するなど、被災地に積極的に溶け込んで信頼関係を築き、地域と一体となって復興を見とどける覚悟が必要であると考える。」との見解を示しています。

【関連するホームページ】

□ 陸前高田市リポート (名古屋市ホームページ) http://www.city.nagoya.jp/kurashi/category/20-2-18-0-0-0-0-0-0-0.html

□ 東日本大震災への名古屋市の対応について (名古屋市ホームページ)

http://www.city.nagoya.jp/kurashi/category/20-2-17-0-0-0-0-0-0-0.html

□ 陸前高田市ホームページ http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/ index.html

# イタリアに学ぶ歴史まちづくり

名古屋市住宅都市局 歴史まちづくり推進室 室長 山内 正照

### 1. はじめに

名古屋市では平成21年に「歴史的建造物の保存及び活用の方策について(答申)」が名古屋市広告・景観審議会から出され、平成22年に歴史まちづくり推進室が創設された。また、平成23年には歴史まちづくりの基本方針である「名古屋市歴史まちづくり戦略」が策定され、あわせて身近な歴史的建造物の登録・認定制度が新たにスタートした。



図1 「名古屋市歴史まちづくり戦略」

全国的にも「歴史まちづくり法」が平成20年に制定されるなど歴史まちづくりに対する関心が高まっているが、歴史的建造物の活用に軸足をおいた取り組みは、まだ歴史が浅く、所有者の意識や制度面、技術面の問題など多くの課題を有している。昨年の秋、歴史資産の宝庫で

あるイタリアの中で、戦災被害を経験している 工業都市という点で共通点の多いミラノとトリ ノの調査の機会を得た。今回、その調査結果を 中心に名古屋の今後の歴史まちづくりについて 考えてみたいと思う。

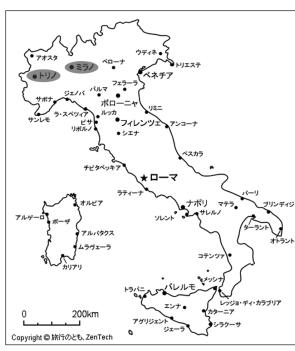


図2 トリノ、ミラノの位置



### 山内 正照

#### ゆまうち まさてる

1983年 名古屋市計画局採用

1994年 財団法人名古屋都市センター

研究主査

2005年 財団法人名古屋都市整備公社

主幹

2009年 総務局交通政策室長

2010年より現職

## 2. イタリアの都市計画制度

イタリアでは戦時下の1942年に都市計画法が制定され、自治体による都市基本計画(P.R.G.)の策定や強力な土地利用規制が可能となった。しかしながら、戦後、施行令が制定される前に、ミラノやトリノなどの北部工業都市では乱開発が進んでしまい、環境悪化を招く結果となってしまった。この状況を打開するために1967年に「橋渡し法」が制定され、「計画なければ開発なし」の理念や歴史地区の指定による面的な保存が義務付けられた。1977年には「ブカロッジ法」が制定され、開発負担金制度が導入されるなど都市計画制度とその自治体権限の完成をみることとなった。

現在は都市基本計画(P.R.G.)のもと、強い土地利用規制と開発負担金制度によって、自治体によるまちづくりがすすめられている。しかしながら、イタリアでは税のほとんどが国税であり、自治体の自主財源が脆弱なことが大きな課題になっている。

# 3. イタリアの歴史的建造物 保存・活用制度

イタリアでは都市計画で歴史的建造物の保存 活用が詳細に規制され、個々の建物の価値に応 じた改修や保存範囲が定められている。資料や データも建物毎に整備されている。

文化財としての価値判断は国の地方機関である文化財保護局が担当し、実際に規制をかけ、許可をするのは自治体の都市計画行政である。ミラノ文化財保護局での聞き取りでは、1936年以降、築50年を経過した建物も文化財指定の対象となり、特に公共建築(教会、学校など)は築75年経過すると自動的に文化財と同様の扱いになるように制度改正されている。

公共建築は自治体が責任を持って保存するが、民間所有の歴史的建造物に対する経済的な支援は、自治体など行政の支援がほとんどなく、企業や市民による資金提供も銀行が行う支援事業を除いてほとんどない。イタリアの税率が高いことや寄付に対する税の減免などがほとんどないことが理由と思われる。

# 4. ミラノの歴史まちづくり

### (1) ミラノの歴史

ミラノは紀元前6世紀のケルト人の町をもと にしており、古代ローマ帝国のもとで繁栄し、 4世紀には西ローマ帝国の首都になった。その 後、11世紀に自治都市として神聖ローマ帝国 からの独立を果たした。中世後期からルネッサ ンス期にかけてヴィスコンティ家のもと黄金期 を迎え、運河網が整備されるなど商業都市とし ての礎を築いた。しかしながら、周辺国の侵略 を受けるなど、紆余曲折を経たのち1861年に イタリア王国に編入された。工業都市、金融都 市として発展していたミラノは第2次世界大戦 で市街地の大半を破壊されることになり、歴史 的建造物が集積する旧市街地も非常に大きな被 害を受けた。戦後はいち早く復興を遂げ、イタ リアで最大の工業都市へと発展したが、1990 年代には工業の衰退とあいまってピーク時には 160万人いた人口も大幅に減少し、現在ではデ ザインを基軸とした産業再生などに力を入れた 結果、人口も130万人くらいで安定し、国内2 位の大都市としての地位を確立している。

### (2) 戦後のまちづくり

戦後は、歴史まちづくりより経済復興を最優先に整備がすすめられたため、ミラノ中央駅の周辺は近代的なビル群へと変貌を遂げ、高層建築も容認するまちづくりがすすめられてきた。

しかし一方では、旧市街地の中心部では街区 構成など都市計画を変更することなく歴史的建 造物の復元整備も順次すすめられてきた。

歴史的な建造物の復元にあたっては、オリジナル材料で忠実に復元をすることを基本としつつ、戦災被害の痕跡を敢えて残すことや材料や色合いでオリジナルと復元を区別する工夫もされている。また近年、スカラ座は現代的な演劇需要に対応できる様に増改築が行われ、建物をより良く使い続けるための改変にも果敢にチャレンジが行われている。



写真 1 奥はオリジナル、手前は復元。煉瓦の色合い や窓のデザインが変えてある。

### (3) これからのまちづくり

ミラノは2005年に策定した都市基本計画に 複数の重点開発区域を位置付けており、基本方 針として産業遺産の活用や水辺の復活、緑地の 創出などを掲げている。

精油プラント跡地のニュー・フィエラ地区ではミラノ新見本市会場が整備され、2015年のEXPO会場整備もすすめられている。EXPO会場では周囲に水路を廻らせ、運河が張り巡らされていた水の都ミラノを復活させる取り組みもすすめられている。ミラノ市内の運河は、近代的な都市計画がすすめられるとともに大部分は姿を消してしまったが、ナヴィリオ・グランデとナヴィリオ・パヴェーゼの2運河が貴重な産業遺産として残されている。運河沿いのナヴィリオ地区は若いデザイナーや職人の人気の場となっており、アトリエやボッテガ(工房)、ギャラリーとして活用されている。

旧見本市会場跡地では超高層ビル3棟の建設 や大規模な緑地整備が進められており、ミラノ で最も注目される開発事業となっている。その 他、ピレリ・ピッコラ、ボヴィーサなど市内各 所で産業遺産を活かした工場跡地等の開発が進 められている。



写真2 ナヴィリオ・グランデ沿いの風景

# 5. トリノの歴史まちづくり

### (1) トリノの歴史

トリノの起源は、紀元前、ポー川沿いに生れた「カストラ・タウリノールム」という町であり、「トリノ」という名前の起源でもある。1416年にイタリアのピエモンテ〜フランス国境の山岳地帯を支配していたサヴォイア家の公国の一部となり、その後、公国の首都となった。18世紀前半にサヴォイア家はサルディーニャ島も領土に加えサルディーニャ王国を形成し、トリノはその首都としてさらに発展した。

17世紀以降、ローマ時代の碁盤の目状市街地を下地に市街地が形成されてきた。当時、主要な道路沿いの建物ファサードは連続させ、建物低層階はセットバックして歩行者空間(ポルティコ)を整備するルールが定められ、現在のバロック様式の整った景観と総延長約20kmのポルティコが生み出された。この時期、世界遺産のマダーマ宮殿を始め多くの建築を設計した建築家ユヴァッラのまちづくりへの功績も大

### きい。

1861年にはイタリア王国統一がなされ、4 年後に首都がフィレンツェに移るまで、トリノ はイタリア王国の最初の首都となった。トリノ はミラノに次ぐ工業都市であり、1970年代に は120万人もの人口を擁する大都市として発展 したが、1980年代以降、基幹産業である自動 車産業の不振とともに人口は減り始め、現在は 約90万人まで落ち込んでいる。

現時点でもイタリア屈指の工業都市であるが、工業だけでは都市の衰退を防ぎきれない状況にあり、2006年の冬季オリンピックを契機に文化観光都市を柱に都市再生の道を探り始めている。



写真3 トリノの市街地



写真 4 ポルティコ



写真5 マダーマ宮殿

### (2) 旧市街地の環境整備

戦後、ミラノ同様に経済復興にまちづくりの 重点が置かれていたため、王宮前広場が現在の 様な歩行者用広場として整備されたのは1990 年代末であり、旧市街地の歴史環境整備など歴 史まちづくりに重点が移されたのは比較的最近 である。王宮前広場も従前は青空駐車場や車の ロータリーになっていた。

現在は「歩きやすいまちづくり」を基本コンセプトに公共的な車以外は旧市街地への乗り入れを排除する政策を取っている。旧市街地で最も賑わいがあるガリバルディ通りは1700mの長さを有し、ヨーロッパでも最長クラスの歩行者専用道になっている。



写真6 ガリバルディ通り

### (3) 産業遺産を活用したまちづくり

トリノ市が都市再生の柱としてすすめているスピーナ計画では産業遺産を活かしたまちづくりがすすめられている。スピーナ計画は、「スピーナ・チェントラーレ大通り」の整備と隣接する総面積約200haの複数の大規模開発で構成されている。市街地の分断要素になっている既存の鉄道を地下化して大通りを生み出し、並行して地下鉄整備を行うことにより、駅の乗り換え利便性を高める。大通り沿いに展開される4つの開発エリアは、スピーナ1~スピーナ4と名付けられて事業が進められている。

スピーナ1では、住宅開発と古い工場を活用した商業施設の整備が進められており、大通りの起点となる高層ビルが予定されている。住宅の価格は100㎡で約30~40万ユーロで平均的市民にはやや高い物件となっている。

スピーナ2は、旧イタリア国鉄の列車修理工場や裁判所などがあった地区で、ポルタ・スーザ新駅や高層ビルと一体的な新都心を形成する重要なエリアである。大通りを2か所で跨ぐトリノ工科大学の建物敷地にもなっており、建物は巨大門のような景観を形成している。また、1800年代末に建設された列車修理工場が展示施設(OGR)に転用されている。

スピーナ3は、製鉄所などが集中する100ha 以上の広さの地区で、ドーラ川沿いの大公園(約45ha)を中心に、住宅地や商業施設などが建設されている。ここの住宅はスピーナ1より低価格となっている。公園には旧工場施設の一部が産業遺産として残されており、巨大な柱が林立する様は壮観である。この地域はドーラ川の水力を活用したゼロエミッションパークを目指している。

スピーナ4は、トリノ市街地の北からの玄関 口として開発が進められている。

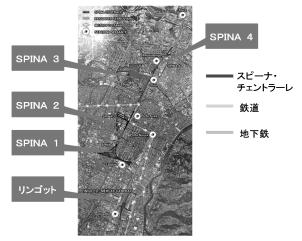


図3 スピーナ計画



写真7 旧イタリア国鉄の列車工場を保存活用した展 示施設(OGR)



写真8 展示施設(OGR)の内部



写真9 旧工場施設の一部が産業遺産として残る公園

### (4) 歴史的建造物の保存活用について 〇リンゴットセンター

1919年に建設されたフィアットのリンゴット工場は、5階建ての建物に立体的に生産ラインが配置され、屋上のテストコースで試走した上で完成車が出荷される当時世界最大の工場であった。かのコルビュジエにも「工業化を象徴する建物」と言わせる工場であった。しかしながら、施設も1970年代には時代遅れになり、1982年に閉鎖された後、再利用されることになった。設計コンペの結果、建築家レンゾ・ピアノによってコンベンションセンター、ショッピングモール、映画館、ホテルなどの入る複合施設へと生まれ変わっている。国際食材見本市が開催されるなどスローフードの聖地であり、トリノにおける産業遺産の保存活用事例としても象徴的な施設である。



写真10 リンゴットセンター外観



写真11 リンゴットセンターの内部

# 〇モーレ・アントネッリアーナ (国立映画博物館)

この建物はユダヤ教寺院とする目的で1863年に着工されたが、結局、トリノ市に移譲されトリノ市のもとで1889年に完成した。建築当時はヨーロッパで最も高い組積造建築物(約167m)であった。しかし、構造的な問題で1904年に大崩落を起こした後、鉄筋コンクリートで補強修復がなされた。トリノはイタリア映画発祥地であり、1958年に映画博物館としてオープンしたが火災で長らく閉鎖され、近年、大規模改修が行われ、2000年に再オープンした。博物館は歴史建造物と現代的デザインの融合する素晴らしい出来栄えで、らせん型通路を立体移動しながら館内を観覧し、「大ホール」ではクーポラ内部に映写される映画を鑑賞できる。



写真12 モーレ・アントネッリアーナ外観



写真13 モーレ・アントネッリアーナの内部

#### (5) カンピドッリォ地区の保存活動

カンピドッリォ地区は1850年ぐらいに旧市 街地(城郭内)の外側に建設された労働者住宅 地区で、市の再開発に反対する保存運動が起こ り、住民によるまちづくり活動が進められてき た地区である。まずは建物に絵を描く活動から 始まり、建物修復や通過交通を排除するまちづ くりがすすめられており、運動資金や修復資材 は市民自らが調達している。地区内の建物の保 存・改修工事は地区内の職人が住民から請け負 い、住民がその費用を支払うといった地区内で 相互に支え合い建物保存をする仕組みが構築 されている。



写真14 カンピドッリォ地区の集会施設



写真15 絵が描かれたカンピドッリォ地区の建物

## 6. 名古屋市の歴史まちづくり

歴史的な建造物の宝庫であるイタリアにあって、工業都市であるミラノやトリノがローマやベネチアといった名だたる歴史都市と文化観光で競うためには、まちづくりでの差別化は必須である。ミラノやトリノ固有の歴史的資源・背景や再開発可能な市街地を活かすことが重要であり、両都市ともに産業遺産の活用や大規模な工場跡地開発を都市再生の戦略的な柱としており、成果を上げている。

一概に両都市と名古屋市を同一視はできないが、都市固有の歴史や資産を活かして魅力的なまちづくりをすすめるという点では共通点も多い。昨年策定した「名古屋市歴史まちづくり戦略」でも戦略の柱に「世界の産業文化都市・名古屋のまちづくり資産を活かす」と位置付けており、名古屋市固有の資産を活用したまちづくりに重点を置いている。産業発展を支えた都市基盤として「中川運河の再生」「名古屋港周辺の魅力向上」「水道施設の保存・活用」をはかるとともに戦災復興計画によって生み出された久屋大通を始めとする都心のゆとりある都市基盤を活かし、まちづくりをすすめることとしている。

## 目標:語りたくなるまち名古屋の実現

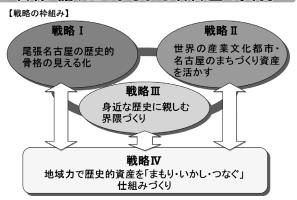


図4 「名古屋市歴史まちづくり戦略」の枠組み



写真16「中川運河キャナルアート」の様子 また、トリノのカンピドッリォ地区での事例 のように古い建物を支える職人や市民の存在、 関係も重要である。名古屋市では、歴史的建造 物の保存・活用のアドバイザーとして「なごや 歴まちびと」を養成し、活躍してもらっている が、現場を担う職人の育成など、更なる人材育 成や支える仕組みの充実が重要と思う。



写真17 「なごや歴まちびと」の活動風景

## 7. おわりに

イタリアは歴史的資産の宝庫であるとともに職人が活躍し、スローフードを始めとするスローライフが価値観として定着しつつある国である。21世紀を先導し、人が中心となり、地域に誇りと愛着を育むまちづくりをハード・ソフト両面において学ぶべき宝庫でもあり、今後もミラノ、トリノを始めとするイタリアのまちづくりの動向に注目しつつ名古屋の歴史まちづくりをすすめていきたい。

#### 名古屋市歴史まちづくりPRキャラクター



「歴まちくん」「おとも」

平成23年度 第 1 回 まちづくり セミナー

## コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる

講師: studio-L 代表、京都造形芸術大学 教授

山崎 亮氏

日 時:平成23年7月29日(金)

場 所:名古屋都市センター 14階特別会議室



本日は、僕が勝手に「コミュニティデザイン」と名づけた類の仕事についてお話しします。「人と 人のつながりをつくっていくことで、ハードを整備してまちを変えるのとは少し異なるまちの変え方 をしてみよう」という話です。アメリカではコミュニティデベロップメントとかコミュニティエンパ ワーメントと言うようですが、デザインという言葉を使うのは、僕の出自がデザイナーだからです。

## 0. はじめに - デザイナーがコミュニティデザイナーになるまで -

もともと僕は、建築の設計事務所で住宅や公園の設計、つまり「ランドスケープデザイン」の仕事をしていましたが、こうしたハードを整えることで何かが変わることは少なくなってきました。

そこで、もう少し違う角度から変えたいと思うようになり、6~7年前から「パークマネジメント」、つまり公園の運営に関わり始めました。せっかく整備した公園が寂しい公園になっていたりすると、最初はデザインに問題があるのだろうかと思いましたが、そうではなくて、むしろ「公園で、誰が、何をするか」という公園の運営こそが問題解決の大事な要素だと気づきました。例えば、公園の中で楽しく過ごしている人たちは、新しい仲間を誘ってまた公園に来るわけです。それが繰り返されると、公園にはどんどん人が来るようになるのです。それと同じことをまちの中で実施すれば、まち全体が楽しくなるのではないかということで「まちづくり」の仕事にも関わるようになりました。

まちづくりの仕事に取組んでいると、まちの住民 1,000 人ぐらいと友だちになります。そうしたら今度は、住民 1,000 人の意見を聞きながら総合計画をつくってはどうか、と誘われるようになりました。そのような経緯で、「総合計画づくり」も手がけるようになった次第です。

いろいろなことを実践する上で念頭に置いているのは「community based」です。地域に住んでいる人たち、そこで活動している人たちの意見を聞きながら、一緒に考えて、デザインしたりマネジメントしたり、まちづくりや総合計画づくりに取組んでいるところです。

## 1. コミュニティデザインとは

では、具体的にどんな取組みをもって「コミュニティデザイン」と言っているのか、事例を紹介しながらお話ししたいと思います。

#### (1) 住民参加による公園の運営 〈有馬富士公園/兵庫県〉

有馬富士公園には、2001 年から関わりました。ようやく設計が終わって工事が始まった時期に知事が替わり、新しい知事が「こんな山の中に公園をつくって人は来るのだろうか」とぽつりとつぶやいたことから、公園緑地課は騒然となりました。そのとき相談を受けた博物館の副館長さんが、「公園もハードだけつくって何の企画もしないのでは、継続的に人が来るはずがない。アメリカではすでにパークマネジメントなる動きが出ている」とおっしゃったそうです。当時、日本ではまだ市民参加型のパークマネジメントの例はありませんでしたが、やったことのない仕事を好んでやるヤツがいるぞ、というふうに僕のことを紹介してくださったらしいです。そのような次第で、聞いたことのない「パークマネジメント」に取組むことになりました。

#### ●住民が住民をもてなす

「パーク」なるもので、いい感じで運営されている例はないかと考えていたところ、真っ先に思い浮かんだのがディズニーランドでした。ミッキーとかドナルド、音楽を演奏する人たちがいて、「ようこそ」と迎え入れてくれる「キャスト」がいるからこそ来園者は夢の世界に行けるのです。そこで、有馬富士公園でもそのようなキャストを置くことを提案しました。ただ、ディズニーランドのように給料を払うことはできません。そこで、お金を貰わずに歌って踊る、そういう都合のいい人はいないかと近くのニュータウンで探してみたら、なんと、たくさんおられました。

そこで、NPO など 50 の団体ヘヒアリングに行きました。どんな活動をしているか、困っていることはないかと尋ね、最後に注目している団体を 3 組ほど紹介してもらい、数珠つなぎでネットを拡げていきました。どの団体も「会議室がない、荷物を置いておく場所がない、チラシのコピーにお金がかかる」等々、抱えている問題はほぼ同じで、県庁職員に相談し問題を一つ一つ解決していきました。

#### ●迎える側(活動団体)と来園者が共に楽しめる仕組みづくり

その結果、さまざまな団体が公園で活動できるようになりました。その際のルールは一つです。来 園者に「ようこそ」という気持ちであなたたちの特技を提供してください、ということです。

例えば、"マクロ探検隊、という団体は、数百万円もする天体望遠鏡を持っているマニアの集まりです。日本で数台しかないような望遠鏡をそれとなく誰かに自慢したい。だから、機材を担いで喜んで公園にやって来ます。子どもたちが双眼鏡で遠くを見ながら「すげえ~!」と驚くと、その横で彼らはすごく嬉しそうにしているのです。そんなふうに、活動したい人と遊びに来た人が出会って、両方が「楽しかった、また来よう」と言って帰っていく、そんな関係性ができてきました。

#### ●増え続ける来園者

ディズニーランドでもオープン時が一番多く、だんだん減っていき、アトラクションを新しくする 度にちょっと増えてまた減る、という曲線を描くのが当たり前だそうですが、有馬富士公園の場合は 増え続けています。その理由は、団体にあります。ある団体では、当初は1ヶ月に1回しか活動でき ませんでしたが、1ヶ月に2回とか4回も活動ができるようになったら、呼び寄せる人の数は2倍、 4倍に増えました。また、活動団体の数も増え、各団体が呼び寄せる人の数がじわじわと増えたのです。

そうなると、運営上は協議会のような話し合いの場や各種部会が必要になります。現在は、「ハードを扱う部会」と「ソフトを扱う部会」と「事務局」とで成り立つ「協議会」という形で回っています。 協議会はラウンドテーブル (参加者は平等) で、いろいろな組織の人たちが参加しています。

#### (2) コミュニティの魅力でデパートを再生 〈マルヤガーデンズ/鹿児島県〉

公園に関わっていたら、デパートから声がかかりました。鹿児島の三越が撤退した後を、新しいデパートに変えるディレクションに取組んでおられたナガオカケンメイさんから電話があったのです。

#### ●デパートに来ない層を動かす

そこで僕が提案したのは、10 階建ての各階にテナントの入らない場所(ガーデン)をつくり、そこで周辺の NPO 等の人たちに日替わりとか週替わりで活動してもらうということでした。

従来のデパートというのは、商品やサービスによる魅力を多々発信することによってお得意様を獲得することに励んできました。しかし、ネットで買物したり郊外型のショッピングセンターへ行ったり、すでにデパートへは買物に行かない層が圧倒的に多くなりました。この人たち、自分に興味あるテーマの催事をやっていればデパートに足を運ぶような気がします。だから、商品の魅力づくりとコミュニティの魅力づくりを同時に取組まなければいけないのではないか、という話をしました。

そこで、公園のときと同じように、お金は払わないけれど歌って踊ってくれる人を調べて回りました。ガーデンでのさまざまな講座、作品展、販売、音楽の演奏等々の活動は、デパートに来なかった層の人たちを呼び寄せ、その人たちがデパートで買物をして帰っていく流れをつくったのです。

#### ●図らずも生まれた成果

不登校の児童たちがフリースクールで作った野菜を販売したとき興味深いことが起きました。売場の雰囲気がダサかったので、建築学部の大学生たちに頼んで、売場のディスプレーやデザインを少しずつ変えていったのです。周囲のオシャレなテナントと比べて遜色がなくなってくると、販売を担当している不登校の児童たちが「ありがとうございました」「僕たちが作った野菜です」とお客さんと対話するようになってきたのです。つまり、オシャレな場にいること、喜んで野菜を買ってくれる人がいることを実感し、自信がつき、コミュニケーション能力が高まってきたのです。フリースクールの理事長は「児童たちが自信をつけてこの NPO を卒業してしまうので売り子がいなくなってきた」と、嬉しいのか悲しいのかわからないようなことをおっしゃっていました。デザインという言葉のなかに人と人との関係性をつくるような取組みをしてきてよかった、とつくづく思います。

#### ●レポーターを養成し、情報発信する

現在、ガーデンには130ほどのコミュニティが関わってくれています。それで、マルヤガーデンとしては開催案内や終了した催事の写真や記録について、情報発信する手が追いつかないわけです。そこで、情報発信するチームをつくることになり、30人限定の「レポーター養成講座」を設けました。

この30人は、6回の養成講座を無料で受けられます。講座は、「美しい写真の撮り方、インタビューの仕方、文章の書き方、ブログやツイッターの使い方、実際に取材してブログにアップする」といった内容です。講座は無料で受けられる代わりに、レポートすること義務となっていまが、本人たちは非常に喜んでおり、二人一組の15チームがシフトを組んで情報発信をしています。

現在、「Maruya Gardens Reporter」というブログでは、1日に何件もの情報がアップされています。もし外注していたら、デパートとしては大変な出費になります。こういうことは、行政についても同様のことが言えるかもしれません。ここの例を見ても、「月に2回ぐらいならレポートしてもいいよ」という人たちが世の中にはかなりいるわけです。こういう人たちの力や気持ちをどういうふうに公益的な方向へもっていくか。そういうことが今後の行政に問われることではないでしょうか。

#### (4) パークマネジメントを応用したまちづくり 〈延岡駅周辺整備プロジェクト/宮崎県〉

延岡駅周辺整備プロジェクトというのは、パークマネジメントの考え方を駅周辺に適用したらどうなるかという話です。これは始まったばかりです。

前述の有馬富士公園では、いろいろな団体が提供するイベントに来園者が参加して楽しむわけですが、それは商店街の空き店舗や駅前広場でもいいのかもしれません。そこで、有馬富士公園と同じ面積を、延岡駅周辺の地区に枠取りしてみました。すると、駅に来た人たちが周辺の神社や商店街の空き店舗で活動することは十分可能だとわかりました。そこで、またいろいろな団体にヒアリングに行き、どうせ活動するなら駅前でやってくださいとお話ししています。すでに80ほどの団体がこのプロジェクトに関わりつつあります。あちこちで活動している人たちが駅前に来て活動することになれば、3グループで一つのプロジェクトに取組むような、そんな関係性が生まれるかもしれません。

そこで、ワークショップを実施しました。1回目は60団体の参加でしたが、4回目には約130団体に増えました。いまや駅前で何をするかということで盛り上がりつつあります。

#### ●商店街を「細長い病院」にするぐらいの発想転換が必要

延岡は人口 13 万人のまちです。いま人口 10 万人前後のまちでは、非常に進んだ取組みが始まっています。要するに、どうにもならなくなったわけです。商店街活性化と盛んに言って、閉まっているシャッターに芸大の学生が絵を描いたところで、もう一度商店街として復活させようというのは論理として成り立たないことがわかってきました。もっと違うかたちで商店街を蘇らせようというわけです。その場合、もう商店街とは呼べない形かもしれませんが、商店街を「アーケードがずっと続いている細長い建物」と捉えれば、それは「全天候型の歩行訓練ができる大きな共有地を持った病院」にできるかもしれません。空き店舗には内科、外科、歯科、眼科等々が入り、若干その間に洋服の店や野菜を売っている店が入っている。そういう発想に切り替えればいいのです。商店街としてダメになりかかったところにユニクロやスタバを呼んできても、トータルで見れば衰退していく道筋になっています。そのことに早く気づけば、一旦シャッター街になる前に、店舗を入れ替えることは可能かもしれません。こういうヒントは、いま人口 10 万人あたりのまちへ行くといろいろ見つかります。そういうところを参考にして、商店街の未来をきちんと見定めていった方がいいと思っています。

# 2. 公共空間に賑わいを取り戻す仕組みづくり - 地域コミュニティとテーマコミュニティー さて、まちの空間、商店街、広場、公園等から賑いが消えたのは何故でしょう。

戦前までは、広場、神社、公園といった公共空間があると、その周りにはたいてい地縁型のコミュニティである子ども会、自治会、商店街、婦人会といった町内会的な集まりが存在していました。しかし、戦後はこういうものが急速になくなりました。かつてはコミュニティの人たちが祭り等を実施して公共空間を使いこなし、また公共空間は日々誰かが通れば挨拶したり何かが生まれる空間として存在していたため、とりあえず公共空間があれば、なんとなく賑わっていたものです。ところが、人口が減るより以前に、コミュニティ自体が成立しなくなったのです。地域で祭りが成り立たなくなったと言いますが、それは公共空間を使いこなす主体が存在しなくなったからです。

では、もう公共空間に可能性はないのかというと、人はばらばらになりつつも、どこかで集まっているのです。例えば、facebook や mixi でつながっていたり、〇〇マニアとして集まっていたりする

わけです。NPO、サークル活動、企業、大学の集まりもそういう類と言えるかもしれません。そういう新しい、ある種のテーマで集まっている人たちのまとまりが、すでに多々活動しています。こういう状況は、特に阪神淡路大震災以降に顕在化してきました。そして、震災の2年後にはNPO法が定められ、こういうまとまりも組織であるとオフィシャルにも認められるようになってきたようです。

このように、公園という公共空間を使いこなしている人は、「地縁型コミュニティ」から「テーマ型コミュニティ」へと変わっていますが、団体として来てくれることには変わりがないわけです。だから、このような新しいコミュニティをいかに公共空間に引き寄せるか。それが今後取組まなければいけないことではないかと思っています。

そこで、その仕組みづくりが必要だと思います。各団体の取組みはよくても、単体ではたぶん成立しません。その時に、公共空間を取り巻く人や団体を支える役割を果たせるのは、行政や土地所有者やコーディネート組織だと思います。この人たちの支えがあってこそ公共空間をマネジメントしたりコミュニティ同士を結び付けていく仕組みはできあがるのではないでしょうか。それが、まちのいたるところで、公共空間で行われるさまざまな活動を促すことになり、まち全体に昔とはまた違った種類の活気、楽しい状況をつくり出すことができるのではないかと思っています。

## 3. 人がつながる仕組みづくり -海士町プロジェクトー

もう一つ、お話ししたいのが、海士町(島根県)のプロジェクトです。海士町は、日本海の沖合いに浮かぶ隠岐諸島の一つ、中ノ島という小さな島です。人口 2,300 人という極めて小さな町で、東京に追いつけ追い越せという時代なら見向きもされないところでした。

#### ●中山間・離島地域は課題先進地域

実は、中山間・離島地域というのは、日本の課題を先取りしている最先端の地域だと僕は考えています。今や日本の人口は減少し始めました。現在の人口予測では、50年後には日本のほとんどのまちでは半分になるということです。ただ、中山間・離島地域ではすでに20年前から人口は減少していますから、より早く課題が出てきて、その課題を乗り越えようと最前線で戦ってきた人たちが中山間・離島地域にいるということです。なかでも、人口が減少しているにもかかわらず住民が非常に楽しそうに暮らしているまちにはいったいどんなカラクリがあるのか、どんな仕掛けがあるのでしょうか。そういう中山間・離島地域にこそ今後の日本の生き方のヒントは多々あると思っています。

#### (1) 目的は住民主体の形成 ー計画づくりから実際の活動まで住民参加でー

海士町では住民参加型による町の総合計画を策定することになりました。計画づくりのワークショップをやっていていつも惜しいと思うのは、計画書をつくるまでは住民で取組んでも、できあがると打ち上げして終わってしまうことです。なぜなら、そこにはいいチーム、いい仲間ができていて、計画を実行する推進力になり得るからです。

そこで、海士町では、2年間は住民参加で計画づくりをし、その後はその住民らが自ら動いてまちづくり活動を始めるようにつなぎたいと考えました。町長さんもそういう進め方を承諾してくださいました。そこで、このプロジェクトでは、住民に「自分たちが主体者になる」という意識を植え付けながら計画策定もするという、二重のワークショップを走らせることにしました。要するに、計画づ

くりのワークショップでも、人と人の結びつきをつくることに取組んだのです。計画だけ進めていると、計画策定が終わった後にチームがばらばらになってしまいます。そうでなく、チームづくりと計画づくりをセットにして進めていけば、2年の間には親密なチーム、非常に強固なネットワークができるものです。そういうことに取組んだのが、海士町プロジェクトです。

#### (2)「チームづくり」と「計画づくり」を同時進行

まずは、「地域のいいとこ探し」みたいなことをやって、みなで意見を出し合います。そういう話を聞きながら僕らがずっと見ていたのは、実は「その人が何に興味があるか」ということです。それは、後でチーム分けをするとき、意図的に人をうまく配分するための重要な材料となります。

¥テーマに基づいて参加者をチームに分けるのですが、各テーマについてはよくよく考えます。何故なら、テーマ決めは「チームづくり」と「計画づくり」という二つの流れが一つになる瞬間だからです。海士町では「ひと」、「暮らし」、「産業」、「環境」という4つのテーマを設けましたが、そう決めるまでに僕らスタッフは相当なブレイン・ストーミングを重ねました。

チーム分けに際しては、3つのファクターを取り入れました。まず一つは、Iターン、Uターン、地元継続居住者の数が同じ割合になること。実は、人口 2,300 人のうち I ターン者が 300 人もいるのです。Uターン者もたくさんいます。そして地元継続居住者がいます。だから、三者を同じチームに入れて互いを理解させることは非常に大事なことなのです。逆に言えば、IターンとUターンと地元継続居住者が同じぐらいの数で構成されるようにテーマを決めなくてはならなかったのです。そして二つ目のファクターは、年齢構成が同じ配分になること。三つ目は、男女の比率がほぼ同じになること。その 3条件を満たすチームができるようにテーマを設定することが肝心なことでした。

チームの構成に差があると、互いに張り合わなくなってしまいます。例えば、若者ばかりのチームがノートパソコンを使っていると「あの人たちは若いから・・・、俺たちはしょうがないよ」と高齢者ばかりのチームは頑張りません。そういう意味では、3つの変数のあるパズルを僕たちは解かなければいけなかったということです。住民100人に集まってもらい、4つのテーブルをつくり、「参加したいテーマのテーブルに移動してください」と言ったら、だいたい思ったとおりに分かれました。後になって、すばらしいバランスでメンバーが構成されていることにみな気づくわけです。

このあと、オフィシャルには8回の会合を設けて、ワークショップの手法やニュースレターの作り 方などを伝授しました。この間に5回ぐらいずつ集まりがあるので、非公式には40回ほど住民のみ なさんは集まったりしています。重要なのは、各チームでその日に話し合ったことを魅力的なペーパー にまとめることです。それは、もちろん各チームがどういうことに取組むのかを広く町民に知らしめ る意味がありますが、実は各チームを競わせるためにもかなり大事なことなのです。

#### (3) 第四次海士町総合振興計画「島の幸福論 -海士ならではの笑顔の追求-」

海士町の総合計画策定にあたっては、「やはり東京とかとはちょっと違うよね」という話が出てきて、 そのなかから「島の幸福論」というコンセプトが生まれました。海士町と東京とでは、目指す幸福の 指標が違うということです。

東京などの都市では、教育・学力の指標がやたら高く、高学歴の人が多いわけです。少しでもいい

会社へ入って、たくさんの給料を貰って、少しでも広い家に住み、安全な野菜を食べ、自然豊かなところで暮らしたいからでしょう。ところが、実際には、家賃も高くて広い家には住めないし、自然豊かではないし、安全・安心でもない。つまり、彼らが目的としていることはあまり達成できていないように思います。一方、海士町では、学力の指標はそう高くないし、給料もそんなに高くない。ところが、彼らはすでに広い家を持っているし、新鮮な魚も野菜も自然もくさるほどあります。都市の人たちが目的にしているものを先に手に入れているわけです。ならば、学力や所得なんかで競わずに、手に入れたものをいかに自慢げに楽しく使いこなすかを考えればいいわけです。

#### (4) 施策は提案した人 (チーム) が取組む

第四次海士町総合振興計画は、住民の提案をまとめた冊子と行政がまとめた冊子の2冊がセットになっています。行政の冊子はどうせ読まないだろうということで、極力薄くしました。この計画書では、行政が単独で実施する事業と住民と協働する事業とを明確に示しました。住民が実施する事業は、各チームが提案したものであり、提案した人が取組むということで、全部で24あります。

住民からの24の提案については、それぞれ何人集まれば実施できるかを考えました。ここで言いたかったのは、プライベートとパブリックという二つの領域は完全に分かれているわけではなくて、プライベートな仕事からパブリックな仕事の間には、コモンという領域がサイズを移動させながらゆるやかに移行しているということですが、こんなふうに話しました。1人でできることは1人でやる、10人でやれることは10人が集まって取組む。ただ、100人、1,000人が集まらなくてはできないことは行政に頼んで一緒に取組めばいい、と。家の前の道の掃除なんかは行政に頼らず、自分たちで掃けばいいのです。一方、1,000人で取組まなくてはいけないときに初めて、行政とタッグを組んで一緒に協働事業として進めていく。これは議会も含めて了解し、現在そのように進んでいます。

では、各チームの取組みの主なものを簡単に紹介します。

- ■産業チームが取組む提案:炭焼き倶楽部鎮竹林(ちんちくりん) 竹林が広がるのを抑えるために竹林を伐って炭焼きをしたり、その竹炭で石鹸を作るなど、「竹 炭を活用した循環型の産業づくり」に取組んでいます。
- ■暮らしチームが取組む提案:お誘いやさんになろう! 島の人は恥ずかしがりやなので、誘わないと出てきません。そこで、春だから花見をしましょうとか、事あるごとに集落の人たちを誘います。「誘いあってみんな楽しく暮らそう」という取組みです。
- ■環境チームが取組む提案:もっと水を大切に!

離島なので、水は大切です。この水はどこから来ているのか、どれくらい埋蔵量があるかなど、大学と協力して調査しています。全国の名水の場所をめぐる「名水サミット」の開催では、そのマネジメントも引き受けました。「わたしたちの大切な水を意識して暮らそう」という取組みです。

■ひとチームが取組む提案:海士人宿

海士人宿という「住民が運営する趣味を活かした交流の場づくり」に取組みました。海士町では、 空家に若手が集まって、酒を飲みながら話をしたものですが、ここ30年ほど途切れていました。 そういう場を復活させようと、保育園の跡地を自分たちで改修し、バンドの演奏をしたり、イタ リアンレストランを開きたい女性が料理を披露したり、いろいろなことをやっています。海士人宿は、れっきとした総合計画に基づく事業の一つです。人と人の結びつきをつくる、つまりソーシャルキャピタルを醸成するための事業であり、議会でも承認されていることなので、集落の年寄り衆も必ず出てきます。ということで、今やここにはいい関係ができていると思います。

ひとチームのメンバーに、Nさんというコワモテの男性がいます。最初、僕らが各団体にヒアリングに行ったとき「わしゃ、行政のやることは好かん。会には出ん」というわけです。彼はある意味で地域のボスで、まちづくりなどには絶対に参加しないような人たちが彼の周囲にはたくさんいます。逆に言うと、そのボスが参加すれば何人かはついてくるはずだし、一気に雰囲気が変わると思いました。彼は絶対に必要な人だと思い、ひたすら呼びました。そうしたら参加はしてくれたのですが、いつも端っこにいて、モンクばかり言っていました。ところが、後に、このNさんが激変したのです。

#### (5) その後の展開

前述のような取組みは議会でも極めて好評でした。そして、その後もさまざまなプロジェクトが多々立ち上がっています。総合計画策定から2年半経ちますが、大変な勢いです。

例えば、「島留学」というプロジェクトも住民提案から生まれました。海士町にある島前高校では、受験生がどんどん減っていました。生徒がいなくなれば廃校になり、島にとっては致命的なことになります。そこで、東京、名古屋、大阪など都会の中学生に、「日本語が通じる海士町に留学しませんか。都会で生きるのとはまったく違う生き方を3年間ここで経験しませんか」という売出し方をしたところ、この高校ではこの20年で初めて誰かを落とさなくてはいけない事態になったそうです。

一方で、主体的に集まる以外の人たちのことも大事です。高齢であるなどの理由で平場まで下りて こられない人たちがいます。そういう人たちのケアが必要だということで、集落支援員の養成を行い、 現在7人の集落支援員が各集落に入り、そこの住民たちと話し合いながら今後の計画を立てています。

実は、7人の集落支援員を募集したとき、前述のNさんが応募してきたのです。何かの間違いかと思いましたが、彼いわく、総合計画の話をしているときはIターン者がよく勉強しているのを聞いていて悔しかったし、海士人宿に関わることで行政のやることも悪いことばかりではないとわかったということでした。彼は下水道整備の仕事をしているせいか、「あそこの家はおばあちゃんが一人で住んでいる」など集落内のことをよく知っていて、折にふれ電球を取替えるなどの手伝いをしていたようです。本格的にやりたいということで、集落支援員に応募したというわけです。

## 4. 公共的な事業の住民参加を通じて「担い手」を育成

これまで行政は、住民が納めた税金を使って公共的な事業を実施してきました。だから、住民の納めるものが大きくなれば、事業も大きくなり、行政が公共的な事業をすべて担えるような気がしていた時代が100年ぐらい続いたと思います。

しかし、今後はそうはいきません。生産年齢人口は下がり、税収も下がっていきます。すると、公 共的な事業をすべて行政で支えていくのは無理なので、住民が支えることが必要になってくると思い ます。それは、税金以外で公共的な事業をサポートするということです。つまり、ボランタリーな気 持ちが非常に大事になるわけで、そのときには「住民のやる気」をどうマネジメントするかがポイントになると思います。「自己実現したい」とか「こういう仲間がほしかった」という気持ちを、きっちりと公益的、公共的な活動に結びつけていく必要があると思っています。

有馬富士公園で活動している人たちは、行政に代わって公園利用者にサービスを提供しているわけです。かつ、住民が住民に対して小さなイベントを年に何回も提供することは、個々の自己実現につながるのでしょう。つまり、住民たちがやりたかったことを実現できるようにうまくセットすれば、住民の力で遂行できる事業はあると思います。そこの噛み合わせの妙が非常に大切で、今後はここをどうテザインするかにアイデアが求められるのではないでしょうか。このような取組みは住民側にとってどんなメリットがあるのか。それは、2年とか3年も一緒に活動することによって、信頼できる仲間ができることです。それが究極の目的だと言えるのではないでしょうか。

いまの日本には鬱の人が100万人いて、3万人も自殺しています。悩み事を相談するには、家の人は近すぎるし、職場の人は利害がありすぎる。そういうとき、こういう活動を一緒にしている人たちというのはそんなに近すぎず、そんなに利害もない。海士町のあるチームの女性は乳がんを患い、放射線治療と薬で治りましたが、当時は相当落ち込んでいました。そのとき、同じチームの人が「おまえがやろうと言ったプロジェクトだろ、おまえが落ち込んでどうすんねん」と言って一緒にプロジェクトを進めることになりました。彼女は「あのチームがなかったら、自分はどんな気持ちで生きていただろう。想像するだけで恐い」とおっしゃっていました。そんなふうに人と人がつながっていくのを見ることができた瞬間に、こういう仕事をしていてよかったなあと感じます。

#### ◆ 質疑応答

【質問者】 山崎さんの会社のスタッフはどんな人か。チームでワークショップをするとき、どんなことに注意しているのか。

【山崎氏】 スタッフに必要なことは2点です。一つは、阿吽の呼吸でチームプレイができるようになるまで現場でのOJTを繰り返し、それによって然るべきときに然るべき対応ができるようになること。もう一点は、とにかく勉強して膨大な知識量を持つこと。各人それぞれが発してくる言葉に「なるほど、こういうことですよね」と上乗せしながら相槌をうつことが重要だからです。

また、チームで進めるときに大切なのは、「進めるべき方向はこちらだね」という考え方を共有していること。それさえできていれば、現場でのチームプレイは何度も経験しているので変な方向に進むことはありません。

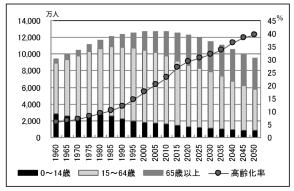
## 名古屋都市圏における エコ・コンパクトな市街地形成

名古屋都市センター 調査課 河村 幸宏

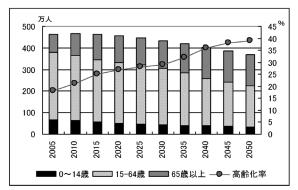
### 1 はじめに

名古屋都市圏の市街地は、急激な人口増加、モータリーゼーションの進展などにより、居住人口密度を薄めながら拡散していった。しかし、2005年に人口は減少に転じ、時代は大きな社会経済情勢の転換期を迎えている。そのような中、従来の拡散型都市構造を転換し、「持続可能な都市を支えうる空間構造」を再構築することが求められている。

本研究では、「持続可能性評価システム」を活用いして、環境負荷、市街地維持費用、QOLの定量的な評価を行い、2050年の望ましい『集約型都市構造』を展望する。



2005年までは総務省「国勢調査」、2010以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計(平成18年12月推計)」より作成図-1 日本の人口推移と将来推計人口



国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計(平成18年12月推計)」により作成(2040年以降はコーホート要因法による独自予測) 図-2 名古屋都市圏の将来推計人口

## 2. 都市構造に関する課題

都市の持続可能性を評価する3つの側面(環境、経済、社会)から、都市構造に関する課題を整理する。

#### (1) 環境

・人口密度の低下によるエネルギー効率の悪化と1人当たりCO<sub>2</sub>排出量の増加

#### (2) 経済

- ・高度経済成長期に整備されたインフラの維持管理費・更新費の増大
- ・厳しい財政状況によるインフラ関連予算の 減少
- ・災害危険地区への居住地拡大による防災インフラ整備費・災害復旧費の増大

#### (3) 社会(生活環境の質:QOL)

- ・高齢者の移動困難性の拡大
- ・公共公益施設の郊外移転や大規模小売店舗の郊外立地
- ・人口減少に伴う空き家や青空駐車場の増加
- ・森林などの自然環境の喪失や農地の減少
- ・東海・東南海・南海連動型地震の発生の高まり

## 3. 「持続可能性評価システム」による 推計結果 (2005年 現況)

#### (1) 名古屋都市圏

名古屋市近郊の拠点駅周辺地区は、QOLが高く、1人あたりCO₂排出量及び市街地維持費用が小さいため、集約地区に適している。郊外の公共交通空白地域及び自然災害危険地区は、QOLが低く、1人あたりCO₂排出量及び市街地維持費用が大きい。

#### (2) 名古屋市

都心部及び鉄道沿線の既成市街地は、QOLが高く、1人あたり $CO_2$ 排出量及び市街地維持費用が小さいため、集約地区に適している。自然災害危険地区は、QOLが低く、駅前エリアであっても集約については慎重に検討すべき。

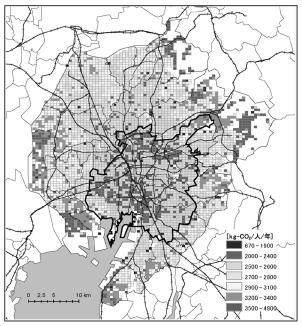


図-3 1人あたり環境負荷(CO<sub>2</sub>排出量)の分布

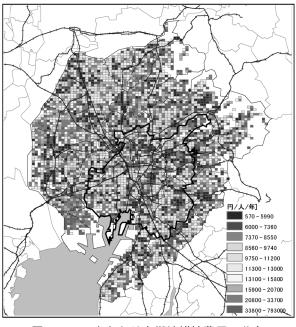


図-4 1人あたり市街地維持費用の分布

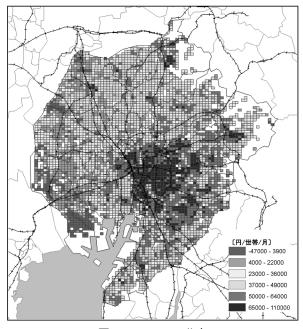


図-5 QOLの分布

## 4. めざすべき都市構造

成り行きに任せてまばらに居住人口が低密化し、住環境が悪化していくのを座視するのではなく、「駅そば集約」を計画的に進めることで、都市圏全体の中心拠点から日常生活をまかなう生活拠点まで、適度な人口密度を有する多様な駅そば地区が重なり合いながら共存し、それぞれが利便性の高い公共交通機関で連携され、適切な役割分担を発揮できる多核・多様・連担型の『集約型都市構造』を実現する。

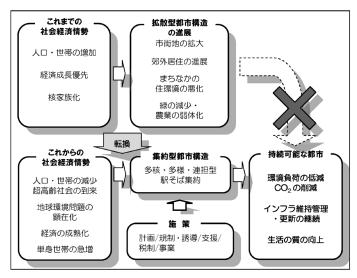


図-6 めざすべき都市構造

# 5. 都市構造改編シナリオによる分析

都市構造改編シナリオを設定し、「持続可能性評価システム」を活用しながら、環境負荷、市街地維持費用、QOLの定量的な評価を行った。

表-1 都市構造改編シナリオのケース分け

Case1 BAU		コーホート要因法による人口将来推 計にもとづく成り行き社会				
Case2 多極集約型		駅そば地区以外で建て替わる住宅が、 最寄りの駅そば地区に集約すると仮 定				
	Case2-1 40%移転	・建て替わる住宅のうち、その半数が 駅そば地区に移転すると仮定				
	Case2-2 80%移転	・建て替わる住宅すべてが、駅そば地 区に移転すると仮定				
Case3 一極集約型		駅そば地区以外で建て替わる住宅が、 名古屋市内の駅そば地区に集約する と仮定				
	Case3-1 40%移転	・建て替わる住宅のうち、その半数が 駅そば地区に移転すると仮定				
	Case3-2 80%移転	・建て替わる住宅すべてが、駅そば地 区に移転すると仮定				

## 6. 「持続可能性評価システム」による 推計結果(2050 年シナリオ別)と考察

#### (1) 環境負荷 (CO。排出量)

集約化によって、2050年の総CO₂排出量は現況に比べて減少するが、1人当たりに換算すると現況とあまり差異がない。

人口が減少する中で、1人あたりCO₂排出量を削減するためには、都市構造の改編に加えて、以下のような取り組みが必要である。

・交通起源:公共交通サービスの充実、自動 車の技術革新による燃費の向上 など

・住宅起源:住宅の長寿命化 など

・民生起源:技術革新による家電の省エネ 化、省エネ意識の向上と実践、 エネルギーの効率的な利用を可 能にするスマートグリッドの導 入、再生可能エネルギーの積極

的な活用 など

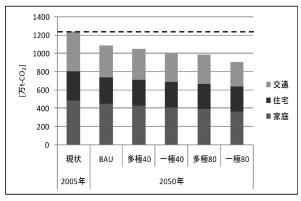


図-7 シナリオ別の総CO<sub>2</sub>排出量

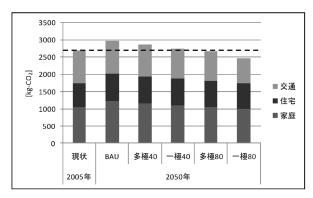


図-8 シナリオ別の1人あたりCO₂排出量

#### (2) 市街地維持費用

現況・BAUシナリオの市街地維持費用と比較して、多極集約型(40%移転)・一極集約型(40%移転)では年間約130億円(現況・BAUに比べて約30%)、多極集約型(80%移転)・一極集約型(80%移転)では約190億円(現況・BAUに比べて約40%)の削減が可能である。

集約化によって市街地維持費用を削減する ためには、将来的に一定の地区から居住とイ ンフラを計画的に撤退させる制度の構築が求 められる。短期的には、以下のような取り組 みが必要である。

- ・現在計画されている都市計画道路や下水道 などの整備について、今後の社会経済情勢 も踏まえながら適切な見直しや代替案の可 能性を探る
- ・インフラのアセットマネジメントを行うことで、維持管理費の平準化、施設の長寿命 化を図る

・公共空間(道路など)のオープン化など、 官民連携の維持管理手法を構築する など

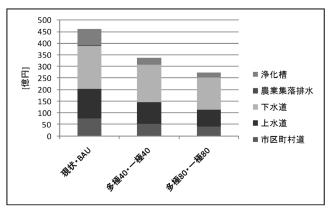


図-9 シナリオ別の市街地維持費用削減額

## 地域の防災意識の高揚など

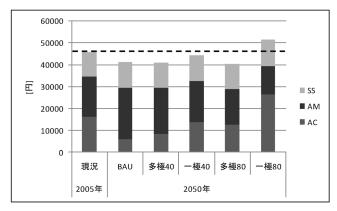


図- 10 シナリオ別のQOL

#### (3) QOL

集約化しても、居住快適性(AM)の悪化と 交通利便性(AC)の向上がトレードオフの関 係になり、QOLの値はあまり変化がない。 集約度が最も大きい一極集約型(80%)の場合 には、現況に比べて大幅な向上がみられる。

集約化を進めながらQOLを向上させるためには、以下のような取り組みが必要である。

・交通利便性(AC):公共交通サービスの充実、 魅力ある公共公益施設・ 病院・就業施設等の駅 そば地区への集約促進 など

・居住快適性(AM):駅そば地区の空き地の有 効活用などによる1人当 たり居住面積の拡大、駅 そば地区の緑の拡充、住 環境・都市景観の向上 など

・災害安全性(SS): 災害危険性の高い駅そば 地区の防災機能の強化、 集約すべき駅そば地区の 取捨選択、災害危険地区 からの完全撤退、個人や

## 7. 実現方策

『集約型都市構造』の実現を図るためには、周辺自治体が一体となって、規制・誘導、支援、税制、事業など様々な施策を、最も効果が表れるよう適切に組み合わせながら実施していく必要がある。しかし、今後の財政状況を考慮すると、行政支援(公共投資)の選択と集中は避けて通れない道であり、行政主導から住民主体、事業から誘導・支援への転換を進めながら、効率的・段階的に『集約型都市構造』への改編を進めていく必要がある。

また、『集約型都市構造』を促進するためには、 就学・就業・結婚・出産・退職などの居住地の 移動を伴うライフステージの転換期をうまく利 用することが求められ、そのときに駅そば居住 を選択できるような施策と環境を用意しておく 必要がある。

#### 参考文献

1)戸川卓哉,鈴木祐大,河村幸宏,加藤博和,林良嗣:トリプル・ボトムラインに基づく都市持続性評価システムによる居住地凝集策の評価.2010.

## 〈平成22年度自主研究〉

## 中川運河のポテンシャル発信 ~運河魅力の共有のために~

元名古屋都市センター 調査課 音堅 清人

## 1. 背景と目的

名古屋市の貴重な水辺空間である堀川や中川 運河に、市民の憩いや潤いの場としてだけでは なく、賑わいの場としての役割が求められてい る。現在中川運河は、物流形態の変化により水 運利用が低下し、水面利用が少ない状況で、名 古屋市の貴重な水辺空間にもかかわらず、市民 には遠い存在となっている。

名古屋都市センターは、市民団体 (NPO法人伊勢湾フォーラム、名古屋ライオンズクラブ)、水辺に関心のある市民、学識者、行政(名古屋市、名古屋港管理組合)で構成する中川運河プラットフォームを平成21年度に立ち上げ再生に向けた活動を行った。活動を通じて中川運河には多くのポテンシャルがあるにもかかわらず、市民には運河の存在が全く知られていないことがわかった。

そこで本調査では、中川運河全体のまち歩きを通して運河の魅力資源を見つけ、アーティストの視点から運河の視覚的なポテンシャルや運河再生の機運醸成として取り組んだアートイベントを通したポテンシャルを紹介するとともに、取り組みを通して感知された運河のポテンシャルの活用について提案するものである。

## 2. 中川運河の特長

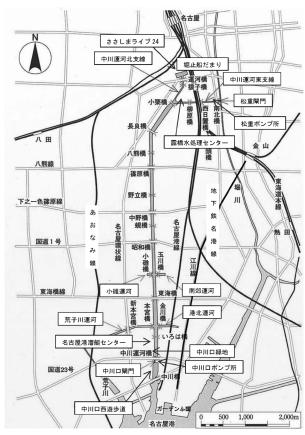
#### 2-1. 水運上の特性

中川運河は、名古屋港と旧国鉄笹島貨物駅と を結ぶ運河であり、全長約8.2km、幅員は、幹 線部63.6m~90.9m、支線部36.3mという広い 幅員で、水深約3.0mの閘門式運河である。

名古屋港の入り口に中川口閘門、堀川との間に松重閘門を設け水位調整をしているため、運河内の水位は一定となっている。中川運河は、水位一定のため護岸と水面が近く、幅が広く広大な水面を有し、スケールの大きさが特徴である。



中川運河標準断面図



中川運河平面図

#### 2-2. 水景

広大な水辺の風景が中川運河の最大の魅力であり、魅力的な水辺の風景として長良橋界隈、小栗橋界隈、猿子橋界隈、堀止船だまり、小碓運河、港北運河、中川口緑地、中川口船だまりがある。

長良橋から観る風景は、背後に名古屋駅の高層ビルが見え都心を感じることができ、運河幅が90mと広大な水面は中川運河でも一番の広がりを感じる場所である。また、小栗橋の南側には、昭和初期より使用されている倉庫が立ち並んでいる。雄大な水面を背後に、三角の切妻屋根が均等に立ち並び、統制の取れた景観となっている。映画「泥の河」のロケ地にもなったこの場所は、古きよき昭和の面影を残す貴重な場所である。



長良橋から上流の眺め

#### 2-3. 歴史的資産

名古屋の近代化と産業の発展を支えてきた歴 史的資産として、松重閘門、中川口閘門、昭和 の面影を残す倉庫群がある。

松重閘門は、堀川と中川運河を結ぶ内陸水運の要として利用されてきたが、通行船舶の減少により昭和43年に閉鎖、昭和51年に使用廃止された。高さ20mの4つの塔はヨーロッパ城郭風のデザインで、名古屋市指定文化財として名古屋を代表する近代化遺産として保存されている。松重閘門周辺は公園として整備され、市民

憩いの場所となっており、夜間はライトアップ され、地域のランドマークとなっている。



現在の松重閘門

#### 2-4. 水面利用

運河は、港湾施設である。港内貨物船より荷物を積み込み鉱石や石炭などの材料を運河沿いの工場や倉庫に運ぶ木造船の「はしけ」が多く通行した。現在は、1日1~2隻の重油を運ぶ小型タンカー船の通行しかないが、船を中川運河で見ることができるのは貴重な体験になる。船を見ると名古屋に港があることを強く意識できる。中川口では、平成4年に名古屋港漕艇センターが完成し、ボートの練習やボート教室が行われ、名古屋レガッタの会場となるなど水上スポーツの拠点となっている。中川運河は、地下鉄の駅からも比較的近く、まちなかでボート練習等ができる。これは、将来的には大きなメリットといえる。



名古屋港漕艇センター(中川口)

## 3. アーティストの目から見た運河の魅力

写真を主なメディアとするアーティストに アーティストの視点から運河の視覚的なポテン シャルを撮影していただいた。

運河にはともすれば、見過ごしてしまいそうな情景や空間にも魅力が潜んでいることに気付かされる。



昔ながらの産業が息づいている(東海橋付近)



倉庫の大きな壁面は、大きなスクリーン(蜆橋付近)

## 4. ポテンシャルを生かした取り組み

中川運河プラットフォームでは、あいちトリエンナーレ2010と連携した運河アートイベントを企画し、中川運河の魅力を発掘し発信する取り組みが行なわれたので紹介する。

### ○中川運河キャナルアート

プラットフォームに参加している市民を中心に実行委員会を立ち上げ、岡谷鋼機の協力により小栗橋南側の第三倉庫を会場とし、中川運河開通80周年記念事業としてアートイベント「中川運河キャナルアート」が開催された。(開催日:2010.10.31)中川運河の倉庫でアートイベントを開催するのは初めての試みであり、古い倉庫内では「現代能×現代音楽」が、屋外では倉庫壁面に投影した「デジタル掛け軸」が行われ、来場された多くの市民が中川運河の新たな魅力を感じていたようだ。



現代能(青木涼子氏) 写真:横関浩



デジタル掛け軸(長谷川章氏) 写真:秦義之

## 5. ポテンシャル活用のあり方

中川運河周辺のまち歩きなどを通して感知された運河ポテンシャルの活用について提案する。

#### (1) 視点場の整備

橋からの眺めを満喫できるような視点場の整備が求められる。橋の改修が未整備のところは、整備する際歩道幅員をできる限り広くして両側に設置し、ゆったりとした気分でそこから運河の眺めを楽しんでみたい。既に橋の改修が完了しているところは、まち歩きコースのルートに入れるなどして、市民がそこを訪れ視点場として活用をする機会を増大する工夫が大切である。

#### (2) 歴史的資産の保存・活用

#### ①古い倉庫の保存・活用

現在名古屋市では、地域の歴史的資源を活かした「名古屋市歴史まちづくり戦略」の策定を進めている。昭和の面影を残す倉庫群については、「名古屋の近代化・産業発展を支えてきた産業遺産」として保存すべきである。横浜市、大阪市そして神戸市などの大都市の臨海部では、倉庫や工場跡地など低・未利用地を活用した文化創造の動きが始まっている。倉庫としての利用が低下してきた古い建物については、名古屋市においてもアーティストやクリエイターの創造の場として、水辺が見えるカフェとして市民の憩いの場として実験的にでも活用してみる。

#### ②中川口閘門の活用

産業遺産でもある閘門は、絶好の社会学習の場といえる。小中学生に対しても積極的に閘門 通過体験を実施する。

#### (3) 水面利用の促進

#### ①水上イベントの開催

直線的で静穏な水面をいかし、レガッタレースを開催し、多くの市民が中川運河に集まり賑わい空間となるようにしたい。また、名古屋港

漕艇センターを活用し、ボートやカヌー教室など、市民が気軽に水辺を体験できるような水上レクリエーションイベントを多く開催する。

#### ②観光舟運の就航

市民や観光客が船に乗り、運河からの景色を楽しんでもらいたい。そのためには、観光舟運として都心で整備が進む「ささしまライブ24地区」と名古屋港水族館があるガーデンふ頭やリニア・鉄道館がある金城ふ頭を結び、名古屋の新たな観光ルートの創設を期待したい。

#### (4) 都市環境軸の形成

運河は、「風の道」、「水と緑の回廊」としての都市環境軸の形成が期待されている。運河の沿岸を整備する際は、市民の憩いの場所となり、また花の名所となるよう緑や花の植樹に工夫を凝らしてもらいたい。市民の大勢が中川運河に愛着をもち、運河は私たちのまちの財産と認識していただくためにも、行政だけが運河整備に関るのではなく、沿岸立地企業、地域住民、市民団体と協働して、水面活用イベント実施、緑化や植樹などを担っていくことが重要である。

#### 6. おわりに

名古屋の産業発展を支えた中川運河は、2010年10月25日に本線開通80周年を迎え、記念事業として、市民向けに運河の魅力を発信するイベントが開催され、あらためて中川運河には多くのポテンシャルがあることが再認識された。

中川運河は、物流としての水運利用が低下するなかで、今後は交流軸、環境軸、創造軸、防災軸として新たな役割が求められている。完成当事「東洋一の大運河」とよばれた中川運河のスケールの大きさは、名古屋のまちを変えるかもしれないほどのポテンシャルがあるように思える。そのポテンシャルをいかし、新たな中川運河としての再生を期待するものである。

## 平成22年度都市センター研究報告

## まちの"界隈"分析 ~那古野地区に焦点を当てて~

名古屋都市センター 調査課 岩田 悠佑

## 1. イントロダクション

#### (1).はじめに

現在、日本各地で「歴史まちづくり」に向けた取り組みが展開されているが、ここ名古屋でも、平成22年度より担当部署が新設され、本格的な施策展開が進んでいる。

これまでの「歴史まちづくり」関連制度は、個別の歴史的建造物の保存など静的保存に軸足を置いたものであり、生活に立脚する地域資源全般を継承する動的保全の側面が弱かった。しかし、今後は、歴史まちづくり法施行に見られるように、様々な要素を包摂しながら地域づくりに歴史的資源を活用するという流れに沿って、静的・個別的な「文化財行政」から動的・総合的な「まちづくり行政」へと移行することが求められている。こうした視点を踏まえ、本稿では、人々の生活の営みと歴史的資源との融和から導かれる"界限"について考察を行った。

#### (2). "界隈"とはなにか

既往研究による定義や字義などを参照すると、"界隈"とは、「一定の物理的空間における人の集まりや行動により構成される」ものであることが分かる。つまり"界隈"はもともとそこに存在するものではなく、人々の普段の生活の営みを通じて自然発生的に形成されていくものと推察される。

こうした「現象」を現す概念 "界限" の究明にあたっては、具体的な地域をモデルケースとしてその現況を把握しつつ地域における人々の営みの分析が不可欠であり、そのうえで、どのような地域資源が核となりうるかについて考察しなくてはならない。

これらの点を踏まえて、名古屋市西部に位置する那古野学区を調査対象とした。この地区は、

名古屋駅近傍にありながら堀川や四間道など歴 史的資源が残り、また、「下町」や「人情」な どの語が良く似合う円頓寺商店街が存在する。

## 2. 調査地区の概要

#### (1).沿革

ここで、対象地区について簡単に沿革を述べ たい。

那古野地区は、堀川開削に起因して物流の拠点として栄えた。当初は、美濃路の沿道として発展したが、1700年の大火を契機に四間道が整備され、さらには1724年の大火を契機に円頓寺及び慶栄寺が現在の位置に移転し、門前町が形成されたことにより一層の発展を遂げることとなった。

明治に入り、笹島に鉄道駅が開設されたことを契機に円頓寺通が発展し、円頓寺商店街が誕生した。以降、市内では堀川以西で最大の盛り場となる。また、この地域で菓子製造業が営まれ始めたのも明治に入ってからのことである。

1945年の戦災により円頓寺商店街は全焼するが、その後急速な復興を遂げた。しかし、戦後の高度成長期には、市電の廃止や名鉄瀬戸線の撤退などにより、以前ほどのにぎわいは見られなくなった。

近年、一部で再開発が進み、地域内にも高層 建築物が見られるようになった。また、その一 方で、古い木造家屋を活かした商業利用が進み、 趣ある町並みが形成されつつある。

なお、那古野学区の人口は3,854人、世帯数は2,009であり、1世帯あたり人員は1.84人となっている。人口密度は12,890人/km<sup>2</sup> と全市平均6,919人/km<sup>2</sup> を大きく上回る。(平成22年10月時点)

#### (2).土地利用状況

住宅地や商店街沿いでは低層の建物が多いが、幹線道路沿いでは5~7階程度の建物が多く見られる。また、地区南西部では名駅近づくにつれ高層の建築物が多くなる。

この地域は都心として位置付けられており、 大半は商業系用途地域を指定されている。した がって、容積率は、都市計画道路に面していな い街区内は400%、都市計画道路沿いは500%、 名古屋駅周辺や桜通沿いでは800~1000%と されており、かなりの高度利用が可能となって いる。

こうした中、四間道周辺は「町並み保存地区」 に指定されており、四間道の整備など歴史的景 観の保全が図られている。

#### (3).地元におけるまちづくり活動

現在、那古野地区では、地域企業や博物館、 伝統工芸の職人、商店街、市民団体、大学など 様々な主体による「ものづくり文化の道推進協 議会」が結成され、この地域のまちづくり活動 に取り組んでいる。また、地元住民等を中心に 歴史的建造物の保存・活用や商店街の活性化な ど様々な取り組みを行う団体がある。

## 3. アンケート調査

#### (1).実施概要

アンケート調査を以下のとおり実施した。

調査日時 : 平成22年10月7日~31日

配布地域 : 西区那古野小学校の学区

対象 : 那古野学区内の町内会加入世帯に属

する小学校4年生以上

\*1世帯につきアンケート用紙4枚配布

配布方法 : 学区連絡協議会の協力のもと、各

町内会ごとに各戸配布

配布世帯数 : 1,669世帯

回収数 : 690世帯(1,542通):回収率41.34%

#### (2).アンケートの調査内容

アンケート調査の内容とその狙いを簡単に示すと以下のとおりである。

#### ①.地域資源に対する認知度調査

…寺社仏閣や歴史的な要素、旧町名などについて、 認知度の傾向を調査した。

#### ②.地域資源に対する重要度調査

…歴史的資産、機能面から見たまちの構成要素、 人ソフト的要素など24項目を抽出し、重要度 を4段階の数字で示すことで地域資源の重要度 を定量的に把握した。

#### ③. 「好きな場所」の把握

…回答者が那古野学区周辺の地図上の「好きな場所」を自由に囲んでもらい、これを数値化した。

#### (3).アンケート結果の分析

#### ① 地域資源に対する認知度調査

調査地区内の歴史にかかわりのある事物に対し、回答者が知っていると回答した割合(認知度)を整理した。

この結果、生活や行動の中で接点の多いものや、比較的近年まで現存したものの認知度が高いことが確認された。歴史的資源を認識するうえで、資源と日常生活との距離が重要な要素となっていることがわかる。

#### ②.地域資源に対する重要度調査

全体的な傾向をみると、重要の高いものとしては、商店街の存在、樹木や身近な緑、蔵や古い木造家屋などこの地区ならではのものが多い。その一方で、重要度の低いものとしては、駐車施設、高層建築物に関するものであり、この地区の風情に対して異質の要素を持つものが挙げられている。

なお、アンケートを通して得られた属性ごと の傾向を次頁にまとめた。

#### ★性別

全体的に女性の方が男性よりも高い評価をしている。とりわけ、緑に関する項目についてはその傾向が強い。

#### ★年齢

年齢に伴って評価が高くなっているものとして、 昔の地名や堀川、また近所づきあいなどが挙げられる。とりわけローカルなコミュニティについて は年齢に比例して評価が高くなる傾向がある。

#### ★居住地区別

全体的な傾向として、それぞれの地域に存在する要素を重視する傾向があり、地域資源と居住地の近接性とに相関性がある。特にその傾向は建造物や空間、モノといった物的要素に関して強い。

#### ★居住地区別

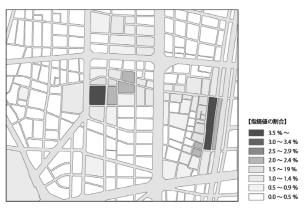
戸建住宅居住者はコミュニティや地域的なまとまりに関する要素を重要視する一方で、集合住宅居住者は高層建築物や都会的な環境を評価しており、また、居住階が高くなるにつれてその傾向が強まる。

#### ③. 「好きな場所」の把握(指摘値)

囲まれたエリアに街区が多く含まれる場合と、少ない場合とで街区に対する「好きな場所」という思い入れの強さが異なることが想定されるので、指摘一つあたりの点数がちょうど1となるよう、指摘の範囲内にある街区ごとに点数を割り振り、その数値を集計し割合を指摘値としてまとめた。

この結果、指摘値の高い街区として、那古野 小学校がある街区、四間道と美濃路に挟まれた 街区が浮上した。

この二つの街区は「好きな場所」として明確 に特定できる街区と言えるだろう。



## 4. まとめ

前章に示した「好きな場所」の集積状況と、「地域資源に対する重要度」によって得られた重要な資源とは、その分布を空間的に配置したときに概ね一致していることがわかる。この点を踏まえて、「好きな場所」が集積している空間的まとまりを"界隈"として定義し、以下の3点について論旨をまとめる。

#### (1).那古野における"界隈"の存在

那古野地区では、広幅員街路で区分された三つの"界隈"が確認された。以下にそれぞれの特徴を記す。

#### ①.四間道界隈

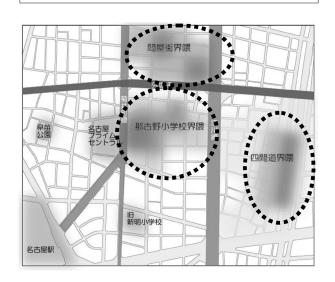
近年整備された道路の舗装や蔵の外壁が統一感を演出している。さらに、その西方の古い町屋の並びや趣のある路地や植栽などにより同様の雰囲気が連続することによって一体的な空間形成がされている。

#### ②.那古野小学校界隈

小学校の周辺には幼稚園や消防署などの公共・ 公益施設が集積しており、こうした施設との一体 性が確認された。

#### ③. 問屋街界隈

北部の問屋街周辺にも街区のまとまりが見られる。この地域については、同様の業態が集積し独特の雰囲気が醸し出されていることによる。



#### (2). "界隈"と道との関係

先述した"界隈"の特徴からも分かるように、 それぞれの"界隈"形成には「道」が大きく影響している。

具体的には、広幅員街路は"界隈"を区分するものとして作用している一方で、細街路などは"界隈"性を強めるものとして作用しているようだ。特に細街路については日常生活の場であると同時に建物との親密感を醸し出す空間形成にも寄与するなど、"界隈"性を演出する大きな要素となっていると考えられる。

#### (3). "界隈"を活かしたまちづくり

最後に "界隈" を活かしたまちづくりの視座 を整理したうえで、那古野地区におけるまちづ くりの方向性を展望したい。

#### ①. "界隈"を構成する地域資源のあり方

調査の結果、小学校、商店街、四間道、問屋街などの周辺が"界隈"として認識された。これらは、地域を特徴付ける地域資源であると同時に、住民の日常生活に密接に関わっているため、これらの地域資源の保存・活用に向けた機運の醸成や、周辺を一体とした空間整備が望まれる。

#### ②.原風景の継承

那古野小学校界隈は、生育過程やさまざまな活動を経て、住民それぞれの意識の中で"界隈"が 形成されている。このことから、地域の求心力の 核となるような物理的要素のほかに、人の営みに より"界隈"が形成されることが確認された。

こうした特徴は、小学校のみならず、商店街にも界隈性が認められることを考慮すると、人が集まる施設や「古くからのお祭り」などに対する愛着が"界隈"形成に寄与することを裏付けており、地域活動を継続して地域の原風景を守っていくことの重要性がうかがえる。

#### ③.地域資源の保全

今回の調査研究では、必ずしもまとまりとして 現出していないが、散在する小規模な地域資源を 指摘する回答も多かった。

(誌面の都合上、本稿では詳細を割愛している。)

これらの小規模で身近な地域資源については、 行政などの事業対象となりにくく、地元住民によ る自発的な取り組みしかないため、どういった形 で将来に継承するのか検討しなくてはならない。

#### ④.コミュニティを大切にしたまちづくり

コミュニティを重要と認識していることが、この地域ならではの"界隈"の形成に寄与しているものと考えられる。したがって、幅広い住民の参加により、地元発意型のまちづくりを展開していくという視点が大切である。

#### (4). おわりに

本研究では、那古野地区を対象として、物理 的要因や各種データの現況把握や住民意識の調 査、また、その分析により、那古野地区を多面 的に考察することができた。

おそらく、当地区において、こうした研究がなされたのは初めてであり、今後の政策やまちづくり活動にある程度有用なデータを作成することができたと考えている。今後の政策立案や地域における調査の参考としていただければ幸いである。

 $\langle NUI \nu \pi - F No. 5 \rangle$ 

## 名古屋における計画道路の歩み概観 一古代から市区改正まで一

名古屋都市センター 専任研究員 杉山 正大

## 1はじめに

道には踏み分け道のように自然発生的にできるものもあるが、狩猟採集時代は知らず歴史時代に入ってからは、事前に経路、構造などを計画して築造する道が多いと考えられる。近代に入ってからの都市計画道路は、そうした計画道路の中でももっとも中心的な存在であろう。名古屋における都市計画道路は、1924(大正13)年の最初の都市計画決定を嚆矢とするが、その決定に至るまでには多くの計画の営為があったと想定される。

本論では、古く古代にさかのぼり、最初の都市計画決定に至るまでに、現在の名古屋市域において、どのような道路が計画され、築造されてきたのか、また、その計画意図はどのようであったのか、さらには、そうした経緯が後の計画道路にどのような影響を及ぼしてきたのかを探ることとした。

## 2古代から中世

古代には都と各国を結ぶ七道駅路という交通 通信システムがあった。名古屋市を含む尾張国 には古代東海道(駅路)が貫通しており、近世東 海道より内陸にあって、直線的なルートであっ たとされている。

中世東海道にあたる鎌倉街道は、名古屋市内 西部ではほぼ古代東海道を踏襲したようである が、東部ではやや海沿いに南下し、時代によっ て複数の経路があった。(図1)また、名古屋城 築城以前は、かつては純然たる農村との見方も あったが、部分的に市街化しており、計画的な 道路も存在していた説が有力となっている。



http://www.aichima.net/rekishi/siseki/09/img/p01.gif 図 1 鎌倉街道

## 3 近世

近世には清須越による計画的な城下町が形成され、南北の本町通と東西の伝馬町筋が幹線となった。両者を基本として周辺と連絡する街道が整備された。これらの街道には名古屋城下外を通過する東海道、佐屋路、名古屋城下を貫通する美濃路、名古屋城下から発する木曽街道(上街道)、駿河街道、下街道などがあった。また、碁盤割南端の堀切筋が万治大火後に拡幅されて広小路となり、近代の幹線となる端緒を開いた。(図2)

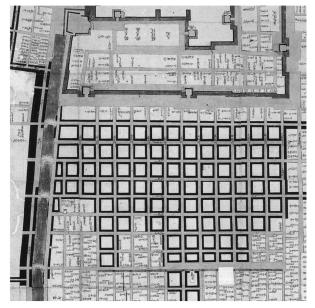


図 2 万治年間名古屋絵図(部分)名古屋城振興協会

## 4近代

近代に入って、鉄道駅との連絡や市電を敷設する必要などから近世以来の狭い道を個別に拡幅する事例が相次いだ。代表的な例としては、名古屋駅の開設に伴う広小路の西部延伸、千種駅の開設に伴う広小路の東部延伸やイベント(関西府県連合共進会)開催に伴う公園道路(現在の岩井町線)などがあげられる。

こうした個別対応によらない体系的・計画的な整備の必要から名古屋市は東京市区改正条例の準用を要請した。東京市区改正条例は、都市計画法以前に東京市に適用されていたインフラ整備主体の事業法規であり、1918(大正7)年に東京以外の五大都市に準用されることとなった。

名古屋の市区改正では道路を中心に検討がなされ、検討段階においては路線網の体裁をなしていた。しかし最終的に1919(大正8)年に認可となった市区改正設計は、市電敷設のため急施を要する五大幹線道路のみとなった。

市区改正設計路線選定に際しては、当時の名

古屋市会内部に疑獄につながりかねない争いが あったようであるが、詳細については本論を参 照していただきたい。

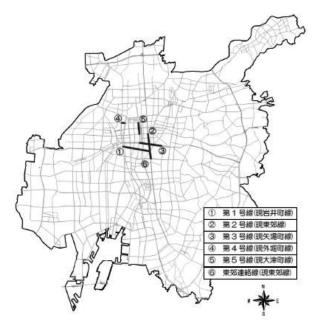


図3 名古屋市区改正設計(五大幹線)

表 1 名古屋市区改正設計(五大幹線)

市区改正設計路線									
名称	区間		12.08	延長	竣工	関連市電路線			
泊你	起点	終点	幅員*	(間)	年月日	名称	開業年月日		
第1号線 (現岩井町線)	鶴舞	水主町	18 32.73	1,311.70	1926(T15) 3.31	岩井町線	1923(T12) 12.22		
第2号線 (現東郊線)	東新町	鶴舞	11 50	820.40	1924(T13) 8.1	高岳延長線	1923(T12) 9.20		
第3号線 (現矢場町線)	矢場町	千早町	11 100	763.10	1924(T13) 10.22	千早線*	1930(S5) 5.9		
第4号線 (現外濠町線)	景雲橋	菊井町	11 30	193.10	1924(T13) 7.13	明道町線	1923(T12) 1.16		
第5号線 (現大津町線)	栄町	大津町	13 30,40	580.44	1924(T13) 7.26	大津町線	1924(T13) 7.30		
東郊連絡線 (現東郊線)	鶴舞	東郊通2	13.5 50	169.00	1926(T15) 3.31	東郊連絡線	1925(T14) 12.23		

\* 上段は当初幅員(単位は間)、下段は現在幅員(単位はメートル)

名古屋の市区改正設計が認可された1919(大正8)年と同年に都市計画法が公布され、翌年施行された。このため市区改正設計五大幹線の整備は、都市計画法に基づく都市計画事業として行われることとなった。

なお、本論は日本都市計画学会中部支部「アーバン・レガシーの活用 名古屋開府400年の遺産を生かす」(2010年11月)に寄せた同名の論考に加筆したものである。

## 〈平成22年度NUIレポート〉

## 名古屋の賑わいスポットと旬なスポット

元名古屋都市センター 井村 美里

人は何に惹きつけられて、まちを訪れるのか。 たくさんの人がいる楽しそうな場所?行ってみ たいと思わせる何かがある場所?そこにしかな い個性や雰囲気を感じられる場所?

今、名古屋の街なかのどこに、どんな魅力を、 人が感じているのか。まちの魅力を「賑わいの 場所」「旬なスポット」という切り口で捉え、 アンケートとグループインタビューという2種 類の手法で調査することとした。それらのス ポットの動向を探り、人々が何に惹かれてまち を訪れるのかを知ることで、地域の魅力づくり や発信方法等に役立つものと考えている。

※この調査は平成22年秋に実施しており、 約1年前の「旬」ということでご理解下さい。

## ○名チャリ社会実験2010によるウェブアン ケート結果

アンケートによる調査では、平成22年10月 ~11月まで実施した名チャリ社会実験2010の 登録者に対し次の質問を行った。

問1 名古屋の街なかで、最も多くの人で賑わっている場所はどこだと思いますか? 1カ所、挙げて下さい。

問2 今あなたの感じている、流行の最先端で シュン(旬)な名古屋のスポットはどこで すか? 1カ所、挙げて下さい。

結果は、賑わっている場所・旬なスポットとも名古屋駅、栄、大須が挙げられたが、その順位は異なり、賑わい≠旬という意識が浮かび上がった。また、旬なスポットにはそれら以外に名古屋城や伏見が挙げられた。名古屋開府400

年祭関連イベントと名古屋城をベースに活動する名古屋おもてなし武将隊が脚光を浴びた時期であり、愛知芸術文化センター、市美術館、長者町、納屋橋の各会場を舞台にあいちトリエンナーレ2010国際美術展が開催された時期でもあった。これらの事業がPRされる度にそれぞれの場所が注目され、多くの情報が発信され、情報量が多い場所ほど旬スポットと感じられている結果となった。

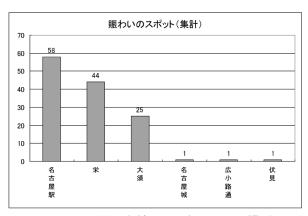


図1 アンケート結果・賑わっている場所

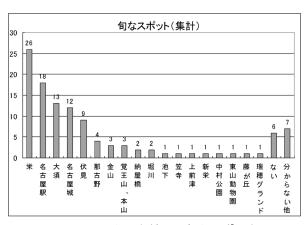


図2 アンケート結果・旬なスポット

#### ○建築系女子学生へのグループインタビュー結果

少人数の対象者に対して座談会形式で質問を 繰り返し、対象者の心理や価値観を引き出すグ ループインタビュー調査は建築系女子学生を対 象に行い、賑わっている場所と、旬な・面白い・ 興味ある場所、そこを挙げる理由を聞いた。

結果、それぞれの場所は以下のようになった。 **賑わっている場所** 

栄、名古屋駅、円頓寺商店街、覚王山商店街、 大須商店街、長者町商店街、イオンショッピ

#### 旬な場所(面白い、興味ある場所)

ングセンター、星が丘等

栄ミナミ、名古屋駅、円頓寺商店街、覚王山 商店街、大須商店街、長者町商店街、名古屋 城、鶴舞、他少数意見で、久屋大通の北の方、 新栄、栄5丁目等

人が多く集まることで活気を感じる場所を「賑わい」、レトロな雰囲気やカフェ、住んでいる人がアクティブなこと等を「旬」と理由つける結果であった。また、旬なスポットの理由には他に「いつ行っても新しい店や発見がある」「小さいがオーナーのこだわりの店」「メインストリートよりも一皮裏側の、表とは違う雰囲気のある場所」というコメントもあり、小さな店があちこちに新しくできている地区を面白いと感じ、自分にあったお店を探し、私の発見を他人に紹介する楽しみが、次なる興味につながっているようである。

名古屋の二大繁華街である栄地区と名古屋駅 地区は、賑わっている場所、旬なスポットいず れにも挙げられたが、2つの地区の捉えられ方 は少し違う。多くの対象者は普段から栄地区に よく出かけ、買物やカフェめぐりで久屋大通の 北の方から、矢場町西側や南大津通を中心とし た栄南地区まで広範囲にまち歩きを楽しんでい る一方で、名古屋駅地区に出かける時は目的地 での用事を済ますだけのことが多い。まちの少 し奥に居心地の良さを適度に混在させることで 回遊が助長され、長時間滞在しても楽しめる街 ができあがるようだ。

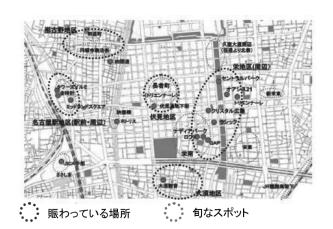


図3 グループインタビュー結果(都心部のみ)

#### ○旬とまちづくり

次世代を担う学生たちが選んだ「旬」なスポットは、賑わいの場所として多くの人が挙げた栄や名古屋駅のような賑わい・流行発信・おしゃれの中心となる繁華街(大通り)の定番的要素だけでなく、その周囲に分布する発見・こだわり・多様性の役割を担う下町(商店街)の穴場的要素の両面を持っている地区であった。目的地での用事を済ますためだけに街を訪れるのではなく、回遊を楽しむことができる街となるためには、この定番的要素、穴場的要素の両面が必要である。

定番的な場所の周囲に分布する穴場的なブラブラ歩きと私的発見が可能な地区は、都市に多様性をもたらし、都市の奥行きを育む可能性を秘めている。歩く、私的発見、レトロ感や商店街を求める次世代の感覚は、そこにしかないこだわり地区の展開という、現代都市が抱えるまちづくりの課題を克服してくれる灯りも示唆している。

## コミュニティデザインから 「震災復興から"みどりのまちづくり"へ」

兵庫県立大学 大学院 緑環境景観マネジメント研究科准教授 兵庫県立淡路景観園芸学校 主任景観園芸専門員

林 まゆみ

# 1. 阪神淡路大震災におけるランドスケープデザイナーの取組み

#### ■震災後の専門家、市民、行政の動き

私たち、神戸市民は阪神・淡路大震災を経験 した。それが発生したのは、1995年1月17日 のことだった。早朝、5時46分、神戸の中心、 三宮地区にあるビルの時計はその時間をさした まま、長い時間とまっていた。私たちは、最初 はかくも被害が甚大であるとは気づかずに、三 宮周辺に仕事のために車で出かけたりしてい た。その後、被害はどんどん膨らんでいき、最 終的には6400余名の人命が失われ、64万棟近 い住宅が被害を受け、その他公共建築や非住家 なども多大な損失を被った。さらに、産業や様々 な歴史的資源も失われるなど、その影響は、 17年目を迎える今も続いている。とはいえ、今、 まちを見回すと、震災の痕跡は殆ど見当たらな い。新しいまちなみが、きらきらと太陽のもと で反射している瓦屋根などと共に、現代風の雰 囲気すら醸し出している。

2011年は、東日本大震災という未曾有の災害がおこった。阪神・淡路大震災の経験則では、カバーしきれない、地震、津波、原子力発電などによる被害が今なお、被災者を苦しめている。

本稿では、阪神・淡路大震災を経験し、その 復興現場に立ち会ったものとして、また、東日 本大震災においては、微力ながらも復興支援に 関わっているものとして、これからのまちづく りや今後の見通しなどについて、論を進めてい きたいと思う。

#### ■まちづくりの展開

阪神・淡路大震災の直後は、まちは壊滅的な 状況ではあったが、住まいの場所は確定してお り、そこの被害状況の差異において、その後の復興の在り方は変わってきた。いずれにせよ、更地となるまでには、瓦礫からいろいろなものを掘り起こすこともできたし、行方不明者も殆どの場合は確認することができた。そういう意味では、津波によってさらわれてしまい、生死の確認ができずにいる人々の多い今回の災害とは様子が異なっていた。ともあれ、瓦礫が処理されて、更地が広がるエリアでは、何をどのようにして、まちを再建していこうか、というイメージが一般の人にも、専門家にも暗中模索から始まる状態であったことに変わりはない。

阪神・淡路大震災後の3月17日には、行政から様々な都市計画事業が発表された。土地区画整理事業、再開発事業などだ。しかし、その面積は、被災地の一部にとどまった。

筆者が関わった地域の一つに神戸市兵庫区の 松本地区がある。ここは、8.9ヘクタールとい う広大な地域で火災が発生し、殆ど何もなく なってしまった地域であった。区画整理事業が 予定されているこのまちに、まちづくりコンサ ルタントとして入って、まちづくり協議会と共 に、毎週の会議を重ねながら区画整理事業に向 けての、まちづくり提案をまとめ上げることが



林 まゆみ

兵庫県立大学緑環境景観マネジメント研究科准教授 京都大学農学研究科博士課程退学 (㈱アルプラン、(財) 丹波の森研究所、神戸芸術工科大学などの勤務を経て現職 コンサルタントとしてや、NPOとして阪神大震災の復興に携わる。著書に「生物多様性をめざすまちづくり」、「緑のコミュニティデザイン」他、日本造園学会賞受賞



松本地区のせせらぎの道

できたのは、震災発生の年の12月のことであった。神戸市では、2番目に早い、まちづくり提案であった。

松本地区は、いわゆる下町と呼ばれている地域で、多くの家屋は、狭小宅地であったり既存不適格というそのままでは再建もままならない建物が多かったりした。ここに区画整理事業を持ち込み、さらに17mという基幹道路とせせらぎを通そうという案は大勢の市民と議論を重ねていく必要があった。結果的には、まちづくりと連動するせせらぎが提案され、大勢の人の目を楽しませながらも現在も市民による管理がなされている。潤いのあるまちなみだ。

阪神大震災における復興で評価すべき点は、 震災後、2か月で一斉に復興計画が提示された ことである。計画そのものには、賛否両論があっ たが、この計画から議論が始まった。筆者が関 わった地域もそうであるが、この復興計画をた たき台に住民との合意形成を進めていったの だ。松本地区では、公園の規模などを変更した りしながら、行政や住民との調整が進んでいっ た。そしてその話し合いの場となったのが、阪 神間(大阪と神戸の間を指す)で100以上でき たまちづくり協議会である。復興計画の提示→ まちづくり協議会を基盤とした、住民+行政・ 専門家による議論の積み重ねが、この大震災の 後、一歩ずつ根気よく続けられていったことは、 私たちのまちの再建にとって、評価すべきプロセスである。

#### ■草の根運動

しかし、前述したように、いわゆる都市計画 事業が計画されて、ケアされた地域は被災地全 体の4%にしかならなかった。それ以外はいわ ゆる「白地地域」と呼ばれた。住宅の共同化な ど個別の取り組みはあったものの、基本的には、 自力再建をしなければならないところである。

このような白地地域への取り組みとして、様々な草の根的な運動が起こっていった。それは、専門家も市民も共にまちづくりへと歩んでいこうとする関西における「ボランティア元年」とも呼ばれた動きでもあった。

筆者の携わった活動としてまず挙げられるのは、建築家と協働した「関西建築家ボランティア」という活動がある。これは被災後約一年、活発に活動が行われ、建物診断、一定地区の復興まちづくり提案、密集市街地等の調査等である。ランドスケープアーキテクトとしてこれらの活動に関わっていったが、専門分野の視点からすると隔靴掻痒の感は免れなかった。

一方、都市計画系の専門家は阪神間では、従 来、「まちづくりコンサルタント」として活動 している人材が多数存在していた。松本地区に 入っていくことが可能となったのも、このよう なコンサルタントの方々と一緒に入ることがで きたからである。神戸市では長年「まちづくり コンサルタント派遣」という制度を作り、地域 の人々が直接コンサルタントを選んで、行政か ら経済的な支援を受けながらまちづくりを進め ていくという制度が整えられていた。これは故 人となったが、水谷頴介という長年、この地で まちづくりに携わってきた建築家とそのグルー プの実績が実を結んだものともいえる。まちづ くりというプロセスが各地で進行していたこと が、背景として成立していたことは特筆に値 する。

## ■みどりのまちづくりのうねりへ

このような活動を経て、震災から約1年たっ



花の苗を運ぶまちづくり協議会のメンバー

た1996年2月に、ようやくランドスケープの 復興を目的とした阪神グリーンネット(正式名 称はランドスケープ復興支援会議)を立ち上げ ることができた。その趣意書には、会の目的と して、①花苗などの供給によるみどりのまちづ くり支援、②まちづくりに資する様々な活動、 ③多くの組織と連携し情報発信する、などが挙 げられている。

阪神グリーンネットには、専門家や市民など約100名が名前を連ねて、様々な活動が展開していった。被災地の各地に花苗を供給したことがその手始めである。これらの花苗は、岐阜県等の生産業者から無償でいただいたものであるが、10数年間継続して行われ、その数は30数万株に上った。

また、被災地の再建に緑の生垣が普及するようにと様々な取り組みも行った。簡易な移動生垣の作成と配布等もその一つである。そして、さらに1年を経過したころには、まちづくり協議会や地元住民からの依頼で各地のまちづくりへのコンサルティングも行うようになった。神戸市東灘区の深江地区に設置した広場「深江花苑」もその一つで、神戸市の事業用地を利用して、手づくりの広場を設置した。この取組は、その後、神戸市の「まちづくりスポット創生事業」という新たな制度を導き、市民による手作りの広場づくりを推進する動きが広まった。

その他にも、仮設住宅から、復興恒久住宅へ移住する際に、コミュニティが失われるという現象がおきたが、これらを補完するために、民間企業の支援を得て、果樹園などを用いてコ



電車路沿いの駅前に作られた深江花苑 ミュニティづくりを行う一環として復興恒久住

ミューティフへりを行り一泉として復興但久住 宅で「ヒメリンゴクラブ」を30カ所近く作る など、多岐にわたる活動が展開していった。

これらの活動は拙著「緑のコミュニティデザ イン(学芸出版社)に詳述されている。

# 2. 阪神大震災がもたらした緑のまちづくりや市民活動のうねり

#### ■阪神グリーンネットのその後

阪神グリーンネットで活動していた多くのメンバーはその後、自由な仕事や活動を、様々な形でより模索していった。企業から離れて、個人でフリーランスとして働きだす人も多かった。冗談のようにではあるが、「フリーターコンサルタント」などと言い合ったものである。しかし、その人たちは現在、新しい分野を開拓しながら活躍している方たちが多いのも事実だ。後により詳細に記述したいと思う。

#### ■兵庫県での取組みー淡路景観園芸学校の開設

兵庫県では、1999年に県立淡路景観園芸学校が開学した。筆者は縁あってこちらに奉職することとなった。学校組織とはいえ、ここは兵庫県の一ブランチであり、出先機関である。同時に、兵庫県立大学の研究所も併設され、我々教員はその両方に所属していることになる。

兵庫県のこのダブル身分は最初戸惑うことも 多かったが、いろいろな意味で、画期的な、ま た機動的な組織形態でもある。淡路景観園芸学



オープンガーデンの一例

校では、震災の体験を踏まえた結果から、市民活動のリーダーを養成する生涯学習機能が充実しており、この13年間に延にして6000名以上の人材を輩出している。一方、最初の10年間はこの学校(といっても文科省の管轄ではない)に設置された専門課程とよばれる4年生大学の卒業生を対象とした景観や園芸に関する専門家養成課程は、平成21年度からは兵庫県立大学大学院として緑環境景観マネジメント研究科として継承され、新たな形で人材が育成されている。

専門家の養成も市民リーダーの養成もいずれ も兵庫県の行っている様々なプロジェクトと連 携したり、実地に地域に入って活動したりする ことが教育研究の基盤となっている。その結果、 地域での活動がより活性化したり、新たな活動 の芽が大きく展開する基盤となっていったりし ている。

#### ■みどりのまちづくりへのうねり

例をあげると、兵庫県下で開催されているオープンガーデンがある。だれでもがウエルカムのこのオープンガーデンは市、町合わせると18カ所で継続的に行われており、その初期の代表はいずれも、当校の生涯学習の修了生である。オープンガーデンがコミュニティ育成、ツーリズムへの寄与、まちなみ形成に大いに資するものであることは多くの研究成果からも明らかにされている。

このように、地域を元気にするまちづくりの



オープンガーデンの一例 一つとして兵庫県のオープンガーデンは大きな 成果を挙げている。

## 3. そして17年目を迎えた今

#### ■いろいろな動きが定着して

2010年の秋に、「パークマネジメント」(学芸出版社)という図書が発刊された。筆者は、編集、執筆に関わった。2003年度に制定された指定管理者制度をきっかけとして、民間も参入した公園の管理運営に市民や地域がどのように関わっていくかについて、23人の著者が論じたものである。北は北海道から、南は宮崎までの各地で、先導的な取り組みを、自ら現場で取り組んでいる事例として多く紹介されている。

筆者は、「公園の担い手を育てる」という節の、「公園を地域で共有するために」というテーマで県立淡路島公園での人材育成や公園を拠点とした地域活性化の取り組みを紹介した。



淡路島公園で市民が管理している花壇

また震災復興に公園が果たす役割という節では、東日本大震災をうけて、「阪神・淡路大震災後の『つながる』仕組みづくり」をあげた。 震災後に様々な人々が地域住民として、行政マンとして、そして専門家やいろいろな立場の人や組織がつながることで、皆がより満足の得られる復興への歩みを進めることができるというメッセージを記している。

#### ■公園マネジメント

公園の管理運営はここ10数年、都市経営の大きなテーマとして取り上げられてきた。「公園は創るから使う時代」というキャッチフレーズのもと、多くの新しい取組が公園のマネジメントとして行われている。従来は公園の管理といえば、維持管理を主眼としたものであったが、近年、より地域や市民に密着した形での公園の活用が模索されている。

先ほど述べた、阪神グリーンネットのメンバーも、指定管理者など新しい組織の枠組みの中で、公園のマネジメントにリーダーシップを発揮している人材を数多く輩出してきた。公園を活用することにより、子供の遊びや環境教育、青少年の健全な精神と肉体づくりへの寄与、そして壮年世代から熟年、高齢者、また弱者も含めて、ユニバーサルに、公園を活用する人々が元気の出る仕組みづくりを模索している。

#### ■活動の輪が広がっていく

阪神間では、震災を受けて、多くの被害がも たらされたにも拘らず、マイナスの遺産だけで はない多くの財産も残されている。市民による



淡路島公園の市民活動グループの話し合い

相互扶助やボランティア精神、オープンスペースや緑の効用への理解などがその一つともいえよう。

東日本大震災を受けて、阪神間からは大勢の 専門家や市民が支援にかけつけている。被災し たものにしかわからない気持ちや活動への想い はどこよりも強いものかもしれない。

## 4. ネットワークの広がり

#### ■東日本大震災の復興支援に向けて

東日本大震災を受けて、阪神間から何ができるのだろう。図書「パークマネジメント」では、 市民と行政、専門家による協議のシステムを確立すること、また他地域からの支援も受け入れられる広域的な復興のプロセスを提案した。

阪神・淡路大震災の復興がそうであったように、一つ一つの復興プロセスで、市民と行政、そして専門家がじっくりと膝をつめて話し合っていくプロセスは必須だ。同時に、決められた方向性に対して、迅速な対応を我々専門家として責任を持って取り組まなければならないことは言うまでもない。

#### ■花やみどりを活用したストレスマネジメント

筆者らは東日本の復興支援の一つとして花やみどりを活用した園芸療法的な活動を行っている。震災などの非常時事態には、被災者は多大なストレスを抱えることとなる。日常生活におけるストレスはある程度までは、それに立ち向かうことができる。しかし、震災によって、家族を亡くしたり、家が流されたりするなどの支えきれないほどのことが起こった時、受け止めきれるストレスには限りがある。ストレスが一定の量を超えた場合には、外傷後ストレス障害(PTSD)や、うつの症状やアルコール依存、ひきこもりなどの原因となることがある。

東日本大震災という未曾有の被害に対しては、生活再建や精神的な立ち直りのためのストレスマネジメント、つまりストレスをコントロールしていくことが必要だ。ストレスへの耐

性を強くしたり、様々な方法でストレス自体を 乗り越えていったりすることが花やみどりを用いて支援したい。花やみどりに触れる活動を行うことによって、①ストレスを感じる時間を少なくし、ストレスの量そのものを減少させる。②隣近所の人とも疎遠になりがちな仮設住宅で、複数の人間と一緒に活動することによって、仲間づくりやコミュニティ作りを行う。そして、被災者が孤独に陥らないように、コミュニケかも合いの気持ちを持てるようにする、③植物を育てたり、栽培したものを収穫したりすることにより、将来に対する期待や夢を持つきっかけく、などの効果があると考えられる。

#### ■仮設住宅支援における花苗緑化

2011年9月3日-7日の期間を通じて、宮城県内の仮設住宅にて上記のプロジェクトとして、プランターの設置を被災者とともに行った。南三陸町の歌津の、「平成の森」及び「港地区」の2カ所の仮設住宅で実施したが、この2地区は居住者の入居の仕方において対照的であった。「平成の森」は比較的規模の大きな仮設住宅だが、その入居者は抽選で選ばれており被災半年後ではまだ自治会がなかった。一方、「港地区」では規模は小さいが、自治会が土地を提供し、入居者の殆どは以前からのコミュニティを形成していた。殆どが以前からの知り合いという関係である。

プランターによる花苗の設置自体は、説明を挟みながら、和やかに進んだ。プログラム実施以降の展開については、自治会のないところは、新しく「花の会」の設置が提案され、既に自治会の動いているところは、互いの相互扶助による管理が提案された。プランターは、継続的な管理が必要で、それに関わることで、「家の中から外に出る」、「植物の世話をする」、「人との会話や交流が生まれる」などの活動や交流、そして、達成感につながる様々なきっかけづくりとしてこのプログラムは機能した。



花苗を用いた緑化活動の支援



花苗を用いた緑化活動の支援

## ■園芸療法を活用したヒーリングプログラム (フラワーアレンジメント)

園芸療法を活用したプログラムの一つにフラワーアレンジメントがある。これは、花の持つ美しさ、香りにふれることによるリフレッシュ、また、作業過程での会話や周りの雰囲気を楽しむなど様々な効果が挙げられる。

このようなプログラム提供する際には、フラワーアレンジメントのプログラム提供のために 事前に行った研修では、上記のストレスマネジメントに関しての対処方法や、プログラムの効果を上げる手法について学習した。

また、プログラム内容に関しては、視覚で楽しむ花の色、嗅覚で感じる花やハーブの香り、触覚に触れる植物の手触り、会話やデザインのアイディアを楽しむことなどが推奨された。プログラム後に茶話会などを催すことで、味覚を満足するハーブティやクッキー、そして聴覚にも訴える会話の楽しみなどを工夫する。など五

感を活性化するための技術的面も学習した。

復興支援には、時期とプログラムを選ぶ必要がある。結果的には、被災後半年たって行った、ヒーリングプログラムは被災者からは受け入れ易く、充実したものとなった。今後の震災復興支援において、花やみどりを活用する際にも、その時期に応じたプログラムの内容について、事前調査等十分に検討していかなければならないだろう。

#### ■震災復興の今後について

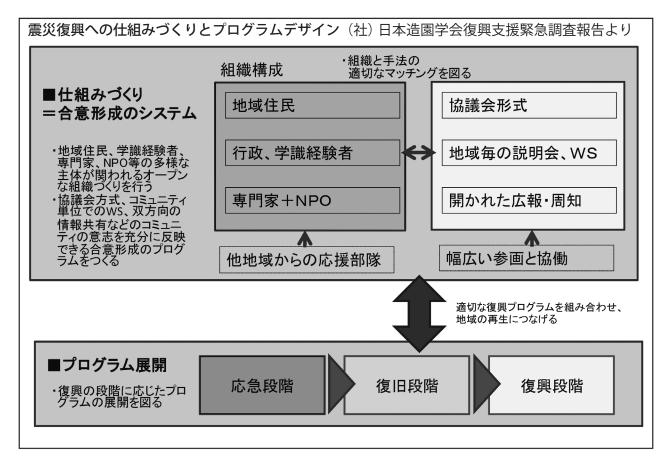
我々、東日本以外の地域からの支援としては 微々たることしかできない。しかし、被災者へ の共感と復興支援への気持ちは、全国のどこに いても持ち続けていくことを忘れてはならない。

震災はどこにも起こる可能性がある。支援を 通して、今何が必要か、そしてこれまで何が必 要であったか、今後のまちづくりの中では何が 必要かを見据えていくことが大切だ。

前回は、花苗緑化としてプランターを用いた が、さらにコミュニティづくりを推進するため には、協働で行う緑化も必要だ。そのためのツールとして、野菜キットを用いて収穫を行うなど、様々なプログラムが考えられる。

前述したように花やみどりを活用したストレスマネジメントは、五感を動かして脳の活性化につなげ、ストレスを軽減したり、共同で作業を行うなどの仲間づくり、そして植物の育ちを見たり、収穫する喜びを体感するなどの未来志向が生まれる。未だ生死の確認できない行方不明者も含めた追悼のセレモニーとしての鎮魂の花祭りなどは祭り事としてや心の拠り所として重要な役割を果たすことができるだろう。

今後も活動を継続していくためには、現地で活動するネットワークとのつながりを大切にしながら、資金、資材、人の配置の拠点となる支援先を継続することや、外部からの支援者もいつでも関われるという体制づくりなども求められる。以下の表に示すように、合意形成のためのシステムとしての仕組みづくりが求められるのではないか。それは地域住民、学識経験者、



専門家、NPO等の多様な主体が関われるオープンな組織づくりを行うことや、協議会方式(これは阪神・淡路大震災では大きな成果を発揮した)、コミュニティ単位でのワークショップや双方向の情報共有などコミュニテイの意思を十分に反映できる合意形成のプログラムを作ることが重要だ。そして、それらのシステムが復旧から復興へと続く長いみちのりに役立つ。

## 4. 復興支援と私たちのまちづくり

#### ■支援する人を支援する意味

復興支援を続けていくためには、支援する人へのサポートが必須である。遠隔地であるので、直接現地に出向いて、被災者を支援することには限界がある。むしろ、被災者に直接関わる生活支援員、教師、医療関係者、行政関係者など、現地で直接被災者を支援している方たちが燃え尽きないように、専門家とのネットワークは今後継続的に必要だ。その他NPO等の市民グループ、企業、他地域からの応援等、多重なネットワークの形成が望まれる。

同時に、今後の展開を考えると、あまりにも 広域的に分断された地域の復興にどの程度、行 政、専門家、地域住民、そして外部からの支援 者などが十分な議論を行えるかが最重要課題と も思われる。

#### ■復興まちづくりへ

復興まちづくりには、まずたたき台となる計画案が出ること、そして、住民が多様な形で議論できる仕組みづくりを作ることが重要である。

阪神・淡路大震災の時には、地元で以前から活動していたいわゆるまちづくりコンサルタントが大勢活躍した。彼らはあるときは、行政の代弁者として、地域住民に語りかけ、ある時は、地域住民の代弁者として行政と交渉した。どちらにしても、ビジネスライクにはできない。仕事を愛し、地域を愛し、人を愛しながらでないと続かない職業であるが、昨今はこれらの人材の後継者不足が危惧されている。

東日本大震災では、あまりにも広域的な被害であるが、やはりどのまちづくりにおいても、 複数の立場の人間どうしの徹底的な話し合いの 場は必須だ。被災地以外からもこのような支援 もぜひ行っていかないといけない。

#### ■防災、減災について

最後になるが、東日本では、津波の被害において、明暗を分けた例がある。一つは、学校などで、防災訓練を実地によくしていたところと、そうでないところに差がでたこと。もう一つは、古くからの言い伝え(津波が来たらすぐに逃げろ)を守っていたところと、そうでないところ。

同じ災害が来ても、もし減災できる可能性が あるのであれば、命を守ることを最優先するた めにいろいろな学びを行っていくことは大切だ ろう。

国内のどの地域においても上のことは同じではないか。そして、防災、減災において、コミュニティの絆は、大きな鍵となるのだ。

#### ■わたしたちのまちづくり

復興支援にかかわることによって、私たちのまちづくりに対しても見えてくることはいくつもある。前段にも述べているが、平常からのコミュニティの育成とつながりは、災害などの非常時には大きな力を発揮する。情報伝達、連帯感、助け合い、共有感などなど。

また過去のまちづくり、災害の歴史からの学びの伝承も今後さらに各地でもう一度見直さなければならないことだ。東北の各地では、寺社で残っている所が山腹に連なっている。地盤や海からの距離など、歴史の知恵が息づいているところが寺社などの宗教的空間なのかもしれない。今後の調査等の成果を待たなければならないのだろうが、住宅の再建にはこのような先人の知恵をもう一度見直したいものだ。

避けて通れない災害というものがあるならば、それを少しでも減らし、緩和し、避けて、そしてこのような自然の猛威になぎ倒されない人のしなやかさやコミュニティの知恵を養っていくことが望まれる。